

皇學館大学研究開発推進センター紀要 第四号
平成三十年三月一日発行（抜刷）

資料

神宮皇學館『第一回修学旅行日記』（明治二十七年）

― 神宮皇學館修学旅行日記・満鮮旅行記（一） ―

皇學館大学研究開発推進センター館史編纂

神宮皇學館『第一回修学旅行日記』（明治二十七年）

― 神宮皇學館修学旅行日記・満鮮旅行記（一） ―

皇學館大学研究開発推進センター館史編纂

連載にあたって

皇學館大学創立百三十周年・再興五十周年記念事業の一環として、『皇學館大
學百三十年史』の編纂が行われ、平成二十四年四月に第一冊目となる「総説篇」を
刊行。以後、「資料篇」三冊、「年表篇・写真篇」一冊を順次刊行し、平成二十六
年十二月に全五冊が完結した。

ただし、五冊のうちに収められなかった原稿も少なくない。当初計画されてい
た「各説篇」は時間的な問題で刊行を断念せざるを得なくなり、また、「資料篇」
と「写真篇」も紙数の都合から割愛したものが多し。

そこで、本誌第一号から第三号には、「各説篇」のため準備されていた原稿の
うち完成原稿として提出済みであった諸篇を掲載させていただいた。今号から
は、「資料篇」への掲載を分量の都合で割愛したもののうち、「神宮皇學館修学旅
行日記・満鮮旅行記」を掲載する。

神宮皇學館では、明治二十七年（一八九四）から修学旅行を実施、また大正
十一年（一九二二）からは本科四年生が修学旅行にて満州・朝鮮方面に赴く「満

鮮旅行」が恒例となる。そして、旅行後には学生による報告会がなされたり、あ
るいは考証を含む詳細な記録が残されている場合が多い。本資料紹介では、神宮
皇學館本科の修学旅行日記・記録類のうち、冊子として刊行されている第一回（明
治二十七年実施）・第三回（明治二十九年）・第四回（明治三十年）及び『館友会雑誌』
に附録として掲載された第六回（明治三十二年）（第八回（明治三十四年）の修学
旅行日記、雑誌『勢陽』に掲載された満鮮旅行記（大正十一年）を順次翻刻する。
なお明治二十八年の第二回修学旅行については、日記が刊行されたことが確認
できないが、その行き先は、皇學館同窓会発行の『同窓会雑誌』第五号に

京都博覧会を利用して第二回修学旅行は企てられたり。今其の向ふ所を聞く
に木野戸、下田、橋村、高野、岡田、長屋、中西、山田の八氏は六月二日本
科生を率ゐて出発し京都、伏見、大坂を経て明石に至り。三橋、宮島、井上、
泉館の四氏は同七日子科生を率ゐて京都に至る。本科は日限十日間。予科は
四日間。

と記されている。明治三十一年の第五回修学旅行の記録は管見に及ばない。
今回翻刻した第一回修学旅行の概要及び掲載した資料は、次のとおりである。

・第一回修学旅行

期 間 明治二十七年十月一日～八日

目的 地 大和地方

引率教員 (四名) 井上頼文教授・三橋要也教授・宮島茂次郎教授・山本家理助
教授

参加学生 (十五名) 本科四年 阿知和安彦、本科三年 石川勝・森幹三郎、本科二年 館信麿・中村亀次郎・福舎基千代、本科一年 安藤正次・宇仁義一・大塚運象・近藤弘代・沢田米吉・高松四郎・松本昌三・宗村信喜・山川鶴市

掲載資料 『第一回修学旅行日記』 (森幹三郎編、神宮皇學館発行、明治二十八年五月、A5判一〇六頁)

(附として、『同窓会雑誌』第三号の「雑録」欄に掲載された、山本家理助教授の記録も最後に附載した。)

翻刻にあたっては、仮名遣いは原文のまま歴史的仮名遣いとしたが、漢字は常用漢字に改めた。行頭を一字下げ、適宜中点を補うなど体裁を整えた箇所がある。文中に、今日的に不適切な用語が使用されている場合にあっても、歴史資料としての性格を鑑み原文のままとしたことをお断りしておく。

なお、『皇學館大學百三十年史』の「資料篇」に修学旅行や満鮮旅行の日記・記録類を掲載することは、渡辺寛名誉教授 (当時、館史編纂室長) の企画したもので、翻刻は大平和典 (研究開発推進センター准教授) が担当した。

第一回修学旅行日記

国学を修むるハ何の爲ぞ。よくわが国体を知り国情をあきらめ以て大に君国に報いむとするにあり。その任重し。斯の学を修むるものよろしく強健ならざるべからず。強健ならざらむにはいかでかその重任を全くし得べき。我が皇學館生徒の体育に重きをおくは蓋これが爲のみ。今年十一月修学旅行の挙あり。青垣山めぐれる大和の山河を跋涉し以ちて日頃鍛錬せる身体を長途に試み併せて年来研究せる學術を實地に質さむとす。行程八十余里。よくその目的を達せり。こハそのをり互に記しつけたる日記なりとぞ。読みもて行くにその猛く雄々しきさま目前に躍り。又かりそめなる戲言のはしにも大和魂の光ほのめきたるを見る。嗚呼諸子よ。諸子が一旦卒業して社会といへる旅路に出で立たむにハこの旅行に勝れる艱難辛苦もいとく多かるべし。その艱難に処し辛苦に堪へて益活潑なることこの旅行の如く養成せる大和魂を事業に顕して以ちて大に君国に報いざるべからず。諸子果してよくこの任務を全くし得べきか。余はこの紀行を以てそが左券となさむとす。

皇學館副館長 岡部 讓しるす

大和旅行記

十一月一日 午前

本科四年生

阿知和 安彦

千早振神代は曰はず。神武天皇橿原に都を遷し玉ひしより此の方奈良の朝に至る迄凡て五十余代其の中十余代の天皇の外は皆此の大和の国にましまして天の下しろし召しき。されば代々の宮所の跡御陵其の頃の神社堂宇さては花紅葉をめでし岡月をあはれみ蛙をき、し河た、なはる青垣山の内に今尚残りていと多かり。

石の上ふるき昔を忍ぶどちの一度尋ねたらむには物学びするにこよなき助を得る事多からむかし。いでや其の由聞え上げて許得てむと是彼謀りしにやがて事成りぬ。出立の日は十一月一日と定められぬ。さるべきたづきもがなと二日三日前より其のかたの書ひもとく。橿原の御陵はまづまぼろしに見えぬ。奈良の大仏は早くも胸のあたりに画かれぬ。と行きてむかくありけむなど考ふるは彼の満州の地図を開きて千々に思ひをめぐらす参謀官にも似たりな。誠や我が征清軍は既に阿利奈礼を渡り九連鳳凰のあだを破り今は將に長駆して奉天に打ち入らむとすと聞けり。此処にすら寒さ漸々加はりて朝夕の風いと身にしむを昨日けふ韓山おろし如何ならむ。名高き満州の深雪をけちらして雄たけびすらむ我がもの、ふあはれ。折からの此の旅行まさに目を楽しましめ心を慰むる為ならむやは。行程は往復八十余里なり。七寸の草鞋を以てよく八日の旅路をつゞげざまにたゆまずありき得なば我も亦帝国の国民軍たる器量は持てりといひつべし。靈しき金鶏に大稜威あらはし玉ひし神日本警余彦の尊の御跡を尋ねては万世の基建て玉ひし其ののみ御状を伺ひ一天万乗の大君を笠置の山に苦しめ奉りし北条足利らが無礼の影をまのあたり木津川の水に写し見て乱臣賊子の罪を七世の末まで鳴らしなば誰かは此の旅行を無益なりと咎めむ。

定めの日来ぬれば皆とくより起きてさわぐ。一行は三橋教授弱げに見参らすれどなかく強き方ならむ。井上教授は常に足とくありき玉ふ。此度の遠征にも例の如くありたれなばあだし人の涙の種なるべし。宮島教授・三橋教授と同じ状におはすらむ。山本助教御顔いと得意なり。小指かゝむべき人ならむかし。さて生徒には大塚・高松の二子は鳥にもたとへつ可きか。装もいと軽げなり。福舎・中村の二子は次なるべし。館・森・宗村・松本の四子は其の次か。石川子いといよげに見ゆれど。山川・宇仁・安藤・近藤・沢田の諸子は最劣る可き相ありなど行く先の有様思ひめぐらす。是等の人々が或は先立ち或は後れ或は勞れ或は泣く取り取りの状は其の日其の日の日記に物せらるべし。果して我が品評に当るや否

や。五時頃出て立つ。空は暗けれど鳥の声こ、かしこに聞えぬ。七声八声と続けるは明方に近ければにや。山田の町はまだ起きたる家なし。夢に尾の上の鐘やきくらむなど歌ひつ、行く。暁の霜いと白し。道々の語草は皆征清軍の上なるに彼の万葉なる防人の歌は此の頃いづれの口にも誦せられたるぞ勇しき。足とき者は外宮に詣で、ゆく。後れたるは遙に拝みて行く。宮川を渡る頃空や、白うなりて星のかげ西の空に五つ四つ。いつしか二つ一つ。川霧いみしうたちこめてさ、らき流る、水心地よし。霜白う置けるを見て

橋の上をこゆる波かと思ふ迄おく霜白し度会の川。

千鳥かまびすしくさわげり。

通ふ人たえにしあとに村千鳥いくたび橋をなきわたりけむ。

小俣の停車場に至る。先なる者はほこらしげに待てり。後ればせに来る者顔の色いと青し。くやしければにや。はた寒きにや。やがて駄夫がならず鈴におどろかされて急ぎ乗るはまだ初旅のわかうど共なり。かうやうの折は然あはてぬ者ぞと翁ぶりてやをら乗る。車は西の方さして馳せに馳す。窓洩る風におのづから頸縮めらる。夫さへあるに例のガタビシヤ汽車左右にゆられ頭ども一所にまるびあふ。白馬見むとて中の御門の戸じきみひき入れし牛車もおもひ出さる。折から左の山の端いと赤うなりて日影おもしろうさし登れり。日出山と曰ふ題にて

日やいづる山やにげつる二つながら動かぬ者とかねて聞きしを

と口ずさむを人々笑ふ。とかくして早田丸を過ぎ相可に至る。農夫が曳く牛のあからめもせでわが車を守り居るを見て

おのが足のにぶきをうしと荒小田をかへすくも恨みかほなる。

松坂の停車場にて山室山神社を遙に拝む。いにし年の春吉野へゆく路おなしくこ、にて

吉野へと道は急げど山室に見捨てもかたき山さくら花

と詠して人にことつけて神前にさ、げしが今年もとて一つうめき出しつ。

天つ日に匂ひし花の美しく咲きしはいつか美しくさきにし花の天つ日に香ひしはいつ今の世はひらけにたれど外国ゆ吹きこし風に人皆の心の花は朝廷に散りと散りしき夕庭にふりとふりしき実もあらず匂ひさへなき言の葉の大和鳥根にしげりあひつ、

六軒に至りて車より下る。大和へはこ、より西南の方さして行くなり。今日西風いみじう吹く。かざかみをながむれば布引の山げに布をひきたらむ様にそびえたり。西へ向ひて行くはいと苦し。片野小山など曰ふ村を過ぎ小松生ひたる芝生にてしばし息ふ。腰なる飯はこ、にて腹の中にをさめられぬ。茶もなく火もなし。余りの寒さに顔は紫色をなし手ははじかみの如く目よりなみだはらくと落す人さへあり。かれいひの上になど思ふに興あり。やがて八太村に至る。万葉集に八太の横山と有るはこ、なるへし。八太は和名抄一志郡八太^{録多}とあり。昔秦人を置かれしより名けたることしるし。横山は夫とわかねど村より少し出づれば道のべに雲出川の上流あり。山をいだきて流る。湯津石村ありて水のたさち流る、音なるかみの如し。或人は阿保山のふもと垣内なりといへど己はこのあたり思ひ合せられぬ。式内八太神社といふは村の西北の方にあり。埴安姫の神を祭れり。拝みてゆく。次は田尻と曰ふ村なり。田舎には珍しき里にて旅籠屋などいらかを並べたり。

此の頃漸々足つかれぬるをかくてはめいほくなしと忍びて行く。

忍ふれど姿に見えぬわが足を豆や出来しと人の問ふまで。

山のただまひ水の流広き松原など見るに諸越の空おもひやられ例よりは様かはりてめづらかなり。彼の工兵が夜の間に橋かけたりと聞く船橋里こ、をたのみとあだ共が力の限りふせぎし牡丹台さては鴨緑江牙山の軍營赤十字旗のたなびくあたり凡て新聞の画報にて見しに通へる所々は敵かしこに有らばいかゞ。伏兵こ、より起らばいかゞなどやうなき空想胸のあたり去らず。折々は足の痛をも忘れてすぐる時ありけり。正午大村と曰ふ所に至りとある茶店に入りて再息ふ。あ

た、かき茶など飲むに甘露々と叫ぶ。さるにてもわが征清軍はかゝる事だに能はざるべきを。

一日午後

本科二年生 福舎 基千代

大村といへる所の茶屋にてしばし憩ひ乾きたる喉湿して出で立つ。汽車を下りしより既に六里余も歩みたれば足はやう／＼重なりぬ。又さばかり広やかなりし四方の眺めもいつしか狭うなりまさりて谷のはざまに入る。町々など見るべき処なく景色のめづべきものもなし。只山の木蔭に紅葉の淡く濃く染めなしたると谷川の流の岩にせかれておのづからの音楽を奏つるとあるのみ。れいのこと、ていたく罵りさわぐ日清の戦争談もいつしかとぎれけむ。今はきこえず。折しも此のつれ／＼を慰むることこそ起りたれ。いづこなりけむ。とある道の辺にある学校の前に通りかゝりぬ。遊歩の時間なりしかば墨くろ／＼と塗りたる幼児あまた出て、騒ぎ居たり。我々の一行を見て如何に思ひたりけむ。口を揃へてチャ／＼と呼ぶ。抑彼等のかく罵るは何か意味ありげなり。ふと心づきて我々の扮装を顧みれば各烏打帽を蒙り袴の股立高く褰けたるさまあやしければなるべし。さるにても彼等が心のを、しさよ。まだ東西も弁へざる幼童にしてしかく敵愾の心あるは教育の力によるとはいへ、亦天然に尚武の氣風を供へたるなり。今の世聖皇上におはしまして文華日に月に進みかゝる片山里に至る迄咿唔の声の聞ゆるは実に聖代の余徳なり。彼等がチャ／＼と誹りしかもなか／＼に興ありなどつぶやきてしらず／＼倭村大宇垣内に至りぬ。時に午後一時四十分頃なりき。路傍の一茶店にて休憩し阿保迄の里程を問ふ。老嫗得意げに鼻動めかして答ふるやう是より世に名高き阿保山越なり。上下三里あまりにして道いと険し。又阿保へはこの山を越え玉ひてより尚一里あり。今夜はこゝにて一泊し明日あさまだきとく越え玉へといふ。我等之を聞きて打笑ひ何とてこの日の高きに宿泊せらるべき。見よや征清の兵士は道もなき荒山中を行き橋梁もなき川をわたるにあらずや。我

等が日頃の健脚を試むるは此の時なり。とく急ぎて後れたる人に先だゝるなど互に勇氣を励して巔目がけて登り初めたり。此の一行に連りし人々は中村・高松・大塚の三氏を始とし松本・宇仁・安藤の諸氏さては我を併せて七人なりけり。半里ばかりを行きていよ／＼坂路とはなりぬ。足に任せて登り始めしに道はつゞらの如くくねり廻りていつ果つべきとも見えず。玉なす汗は衣袵に徹り肩に掛けたるカバンは頓に重さを加へたる心地す。吾等は捷徑を取りたればあるは道もなき崖頭を攀ちあるは樵夫の徑路を伝ひ辛うじて絶頂ともいふべき所に登りぬ。しばし憩ひて西北の方を遙に望めば北勢の諸山濃尾の連峯恰狂瀾怒濤の起伏するが如く雲煙の間に隠見し清波鏡の如き伊勢内海には白帆風を孕みて往来するさま誠に一幅の活画図なり。詩想起りて脳裡を刺撃せしかども詩材满眼却無詩といへるが如く一詠をも得ざりき。かくてかなたを見渡すに森の中より炊烟風のまにまにたなびきぬ。音にきゝし伊勢茶屋ならむ。否とよ。伊賀茶屋なめりといひ争ふ。其は兎に角にかしこにて腹ふくらかして此の山を越えむと十数町の処を只一息にかけたつたり。破れかゝりたる藁葺の板廂まづ目につきたるはおまん小餅とかきたる看板なり。いきせきあへず。とく餅出せといふ。主婦いと氣の毒げなるおも、ちにて今日は売り切らしたりと答ふ。其の失望落胆こゝに事々しく書くまでもなし。僅に一銭のむしいもに腹ふくらかしそ／＼に立ち出づ。突兀たる山迂廻せる坂幾度か越え又幾度か下りけむ。最早降り坂にもなりぬらむと思ふ頃一人の老翁に逢ふ。道を問へば尚降り坂には一山ありといふ。それを越ゆれば伊勢地村なりと聞き高松氏いふやうこれより駆足にてその山をばひた越えに越えむ。我に従ふものはとくこよといひも終へずて駆け出でたり。彼も人なり。我も人なり。なでう後れを取らむとて之につきしは中村氏なり。余もまけじ魂もて二人のあとを追ひて走る。互にまけじ劣らじと飛鳥の如く脱兎の如く足に任せて走りし程に僅に三十分にして一里計の道をひた走りに走り山麓なる伊勢地村に降りぬ。そも／＼この阿保山越といふ峠は伊賀伊勢の境に跨れる有名の坂路にして曩昔は白

昼も盜賊徘徊し行人を劫したりといふ。然るに今は道路開通して二間幅となり腕車も容易く往来するに至れり。伊勢地町を通行する時ある家の前に阿保山峠開鑿記念碑建設事務所と筆太に書きたる標札かゝれり。宜なり。この拳はとひとりごちつ、打過ぐ。こゝより本日の宿泊地なる阿保迄は一里ばかりと聞きたりしかばさ程急がずとも着せらるべしとて少し足をゆるべぬ。さなきだにつかれたる足かけくらべの為いよ、痛みまさりて今は一歩も進むこと能はず。二人の者に励されつゝ、歩む。行けども阿保は見えず。あまりもどかしさに逢ふ人毎に里程を問へば始は半里ばかりといひ次にとへば一里余りと答ふ。何しに後戻りするものかと置れば高松氏笑ひてさなり。君がありきさまにては三足進みても二足は慥にあとへ戻れりとあざける。いと腹立しけれど誠なればいひとく可くもあらず。かくてやうく午後四時四十分兼ねて定めたる阿保町田原屋清右衛門方に着す。うるはしき衣まとひ白きものぬりたる若き女四人五人たちそひてそよめく。いとうるさけれど定りたる宿なればとて草鞋ときて上りぬ。漸くにして後れたる人たち及師の君もうちそろひてつき玉へり。それより順次洗湯に浴し晩食ををふ。本日の行程十七里内汽車の便をかりしは僅に五里あまりなり。常には寄宿舎の外出でたることなき我々書生にとりては随分つとめたりといふべし。おのれはいたくつかれて足さへだゆければそこく日記をかきしるしてふしどに入る。いつ頃眠りにつきしか。熟睡せり。かくて夜半うち過ぐるころほふと目をさませば枕もとなる座敷にての、しりさわぐ音聞ゆ。耳をそばだつれば三絃の音歌舞の声こもく起りていもねられず。夢を破られてしきりに打かこども如何にともすべきやうなし。この騒ぎは夜あけ頃に至りてやみぬ。旅行中尤心をを用うべきは旅宿の善悪にあり。ことのついでにいさゝか記しつくるになむ。

二日午前

本科一年生

宇仁義一

苦しきまゝ、にしばしやすらひて谷底深くのそむ折しもあやふしと袖とられし声

に阿保山の夢はさめぬ。時に六時。三人四人ばかり起きたらむやうなり。彼方此方に云ひかはすは猶床ながらの声なりけり。とかくして起きいでぬ。やがて飯も終へぬ。用意なりて出立たむとする人いそがはしげに用意する人猶煙草などくゆらす人思ひくなり。われは用意いそがはしく取片付けて出立つ。時に七時廿分なり。やゝ長くみゆる町を痛み残れる足にてふみならさむとしづかにゆく程学校役場などきたなげならぬもみえたり。かやぶきの家珍らしからねばうつくしうもあらぬ町かなと言ふに否うつくしき村なりなどうちかへすもおかし。種々評しあひて行く。この村はづれと覚しき処左の方にいとよこもれる森あり。四人三人森の影にみゆるは先に出立ちし人々なりけり。兼ねて聞きし阿保親王の御墓といふ所にやと村人に聞けばさなりと言ふ。田の細路をたどる事一町ばかりにて御墓に到る。制札には垂仁天皇皇子息速別命御墓云々とあり。姓氏録を案するに阿保朝臣の条に

息速別命幼弱之時天皇為三皇子築三宮室於伊賀国阿保村一以為二封邑三子孫因家之焉

とみゆ。これらによりて定められたるなるべし。阿保親王の御墓なりといふは地名につきての附会ならむ。

先しづかにをろかみ奉りつ。露ふみわけて後に廻る。垣間見すればやゝ高まりたる処に内垣などみゆ。これより西南の方に進む。空は青々と晴れわたれるに今しも朝日は光まばゆくさしのほりぬ。紅葉せる西の山は光を受けて錦をほすらむとも思はれ見渡す限り八束穂重げに垂れて光りまばゆきは黄金ともながめつべし。目さむる心地していとめでたきにいっしか羽根と言ふ処に來りぬ。まことにて名に聞く処羽根ならばなど二人三人にて興じあひつ、行く。やがて八丁坂といふにかゝりぬ。この頂上に水のたまり数多ありて景色よし。此の坂はやゝ長けれど平なり。この坂を下りて小波田村を過ぎ又坂にかゝりぬ。こはやゝけはしけれどみじかし。やがて蔵地村といふを過ぎていと広く見はらしたる所に出でぬ。彼

方に家ごみしげく見ゆるは名張町なるべし。右に流る、大なる川は名張川にやあらむ。此の川に沿ひて走れる電信線いとめづらし。この川を隔て、みゆる山は今しも紅葉して又めでたし。時に九時。やうく町に入る。阿保に比べて一きは賑し。町や、ふかく入る程洋物店飲食店など軒をならべ店をつらねたり。此の町のはづれは川合にして二つの橋を渡せり。一は何橋といふにか。古くて知られず。一は黒田橋と明に記されたり。黒田結馬井手の村々を過ぎて安部田村にかゝりぬ。よき茶屋あるま、一休みす。右には山を見上げ左には川を見下す。此の川を隔て、田圃遙につらなり彼の山麓村々の景色面白し。之よりは片山路にて伊賀大和の界も過ぎ三本松といふ処に掛る。此の山路長くして足の痛みはげしくなりぬ。昼飯すべき三本松につきぬ。いとうれし。村人にあふま、ぬし屋といふ宿を問ふに猶三十町ばかりありと言ふ。足のいたみやましつ、行くに同連の人二人三人車を走らせて過ぎこしたり。追付かむとすれどせむなし。時の間に車は見えずなりぬ。とはかりゆく程宿のむかひなりといふものにあひぬ。これ宿引といふ者なるべし。之にひかれて宿につきぬ。此の時先着の人二人ばかり此処を出立つ。彼の車にて過ぎし人三人まだわりご開かずでありけり。腰うちかけてしばしやすらふ。腹はへりたれど物食ふべき勢もなし。

二日午後

本科一年生 山川 鶴一

連れだちて宿を出でしは石川・森・館・福舎の諸子と外に三人四人となりけり。先なるは一しばかり前に出立ちぬと聞きて心や、いらち道あしとも近きをこそとてあへぎく旧道をとるなかに車を命じて新道をとりにしは誰なりけむ。今より車などにすがりて何とかせむ。前途程遠く乗るべき道は猶多からむを。七日の望足りて奈良坂過ぎて笠置を越えむ眺なれぬそは路行き悩み心は後に引けどひかねど大寺のうつゝに残る大慈大悲の法の力をかひやなけむ。其の時こそは天の浮橋打乗らむを一しほの興ならめと笑ひて過ぐれど免れ難きは車の輪立。あすは吾が身

と知らぬげなるも罪深し。今宵の宿りは初瀬の町なり。今は程もあらじと来か、る翁に問へば五拾町はあらむといふ。急ぎ玉へ。一走りせむと喜びつゝ、又も田の面の媪にとへば二里は慥といらふ。福舎子の跡戻り忘れもせぬに今日もかゝる目見る事よと心苦し例へむ物なし。先なるは覚えず。後なるは猶覚えず。西にも東にも道連れは唯松本子・安藤子・宇仁子と予とのみ。人々物もいはねば鳥もあざけりて眼をかすめ流もたえて耳に入らず。足びきの山こえ野ゆくほどに車夫いで来てねもごろに乞ひて止まず。さてはうせたりな。予等の足のたゆげなるを見て付入るにこそ。いひてのけたる前の言葉は反古にもなるまじ。かゝる程なき所をいかでくとしてゆき過ぐるに先の御方々も心よう召し玉ひしを。さりとは御待ち受け申し、かひもなく吾等もいと面目なしなどいふにいよく油断ならじ。人は知らず。今日の吾等に車は用なしと払ひたる袖の下よりおかしげなる女子出て来て勧むる事いかひくし。痛く疲れましたらむを。とく召し玉へや。宿よりの御迎へなりといふ。何とやと思はず振りかへれば松本ぬしすかさずさては宿の殊更なるとりなしにかと問ふ。さにこそ。御方々の待合車夫と思ひきりたる事可笑止さよ。いで其の俣召し玉へと言ふに南無三仕損じたりと飛び乗りたる予等の面もち人見なば如何ばかりおかしかりけむと相見ては、ゑむも嬉しき限りなりけり。二十町はかり走らせて定めの旅籠紀の国屋に着きしは三時頃なるべし。先者とは問ふに何れも初瀬寺にまうでぬ。御方々も先詣で玉へと勧むるまゝに立出てたるこそ思へば余りに早まりたりしか。二町ばかりゆきて見上ぐれば木立深く生ひ茂りていかにもさりぬべき霊場とみえたり。石階を登り回廊をめぐるに其の数の多き其の柱の長きに思はず声を放ち魂をけし堂宇の宏壮なるには仏の善美もこゝに尽きしかと思ふ許り。かくては奈良に入らば大仏のつら魂には狭き心やぬかれなむなど後のことまで心にかゝるもわりなしかし。寺僧頼に寺の縁起をさへづる。引水的説法は聞く耳持たじと撥ねつけたる冥罰観面。悟りてみれば日記の材料有耶無耶として習はぬ経の記し難きも名詮自称なりけり。斯くてさし出でた

る台より見さくれば初瀬の町は隈なく眼眸に入りぬ。枯れたる桜の間より真紅の色のはの見ゆるも盛者必衰の道理に引きあつれば感慨殊に限りなし。僧坊学寮こゝかしこにみえ法衣長く垂れたるが行きかふを人の見おくるもみゆ。猶奥堂をも見むとしたれど足の痛みたへがたければ有縁ならば済度し玉へ。大慈大悲の観世音と足ふみしめて宿に帰りぬ。曩に宿につきし折足も洗ひ風呂にも入り一息つきて行かましかば仏の功德もひとしほあふがれたらましを。宿の主人にとにもかくにも先詣て玉へ。一時も早きは功德なるべしとせきたてられしは中々にて足の疲に物もおほえざりしこそ口惜しかりしか。かくて草鞋を解き風呂に入りて初めて身を横たへたる時の心地極楽は此所より程遠からじとぞ覚えたりし。気もや、ゆるみて心もおちあつたれば更に松本・安藤・沢田の三子と共に出で立つ。観音堂の東に当りて丹塗の鳥居立てり。与喜天神といふ。天曆の昔武磨といふもの神託によりて建立したるものなりとぞ。由緒ありげなれど知る由なし。俊成・定家などの塔も此のわたりに在りと聞けど真偽うけ難し。影向石・影向松などある所を西に下りて観音の階下にいづ。再登らむとしたれど今朝より拾里ばかりも歩きたる足のため物ほしさも堪へがたければ後世は知らず。生きながらの餓鬼道は仏は好ませ玉はぬなんめりとて復登らず。折から梵鐘木陰に響きて暮れそむる夕の色四方より襲ひ来るに今は法の力を借る風雅にもあらずと打連れ立ちて帰りぬ。腹はとゝのひぬ。床はのべられぬ。今宵の夢は華胥の国にやあそぶらむ。

隠国の初瀬の国の名は古学びする吾等の胸には忘れ難き名なりけり。朝倉の宮は何処なりけむ。列城の宮はかしの松原にや。初瀬の小野も訪ふ由なれば知るよしもあらじ。思ふに其のかみはいみじき都の事とて今見るやうにはあらざりけむを。観音の鐘の音高く響きわたり法の光明長くかゝやきてより遠きも近きも唯これのみ二なきものに仰ぐこそうたてけれ。こゝにおきて本居翁の歌はしなく思ひいでられぬ。

仏等は玉のうてなにつかれて神は雨もる小屋のしきやに。

二度三たびつゞくるに無限の感慨おさめむとしてもおさへがたく遂にあやしうも歌ひいでぬ。

仏のみ光かゝやく国所古き都のかけもうつらず。

奈良へ入りて古今を観ぜば有為転変のことわり明鏡をかざすよりも著くうれしうも哀しうも様々の妄想うかび出でむを。奈良の来む日をこゝに賭せむと思ふもをこなりかし。

三日午前

本科一年生 大塚 運象

恃むべくして恃み難きは人の心哉。一日十里の行程にあぐねて宿立ち出る朝まだき車たづぬる吾が心。出発以前までは十里二十里はいと易き事なりと鉄脚うち敲きてほこりし己。あはれ僅八里の道にゑひたる如くなへたる如きは吾ながらいかひなしや。昨日までは己も英雄豪傑と思ひ人にも不世出の大政事家かと思はせし者一朝の蹉跌に狼狽して鈍物となる此の類なるべし。やう／＼かたへの人に励まされて往きぬ。かたへの人とは誰ぞ。高松君なり。いとねもごるなりし紀の国屋を名残惜しくも立出でぬ。昨日中村君と高松君と己と三人先鋒として一・二里許りひた走りしるしにや。今日は足いと重し。出雲・黒崎・脇本・慈恩寺などを過ぎ三輪の大神神社に着きぬ。此の間某の君は皇學館生徒の既往における気性及び品行など語られたり。慷慨奇警の語は一々おのが胸をさしつ。今にしてかゝる事ありもせば此の運象よも逃しはせじなど憤りつゝ、社の境内に入りぬ。境内広やかにして神殿は西南に面し勅使殿右に社務所左にあり。神殿は古びたる建物にて幾百の灯籠をつるしたり。二本杉・夫婦石・鏡池など目易き程にたちならびおもむき一入なり。殊に山のいたゞきなれば眺いとよく三輪町も眼下一眸の中にあり。この社の宮司はもと神宮の禰宜たりし某氏なり。氏は昔て我が皇學館に教頭の名をかかげたる事もありきとか。斯るちなみの有るのみならず。殊に修学旅行の議起りし頃は司庁にありてとくに此の挙をも知り居られたりとか。吾々皇

學館生徒には最深きえにしあり。一行皆敬慕の情厚かりければ今日は必訪はんとて寓所を問へば二階屋なりといふ。恭しく今日の天長節を祝ひ奉りて氏を問ふ。日清の平和も破れ皇御軍の連戦連勝を祝ふ旭の御旗は軒毎にさしつらねられ空吹く風に翻り歓声沸くが如し。氏の宿は町の片隅なり。三橋・井上・宮島・山本の諸教師は修学旅行の大要を述べられたり。氏迎へてはいはく今日はあやにく家内も居らぬば御茶も進せられずと。談話もいとそはくし。下女はしぶく煙草の火のみ持ち来りぬ。こゝにわれは呷きぬ。大和あたりの下女は茶も沸かし得ぬ事のははれさよと。人々皆我が袖を引く。全氏の宅を辞して直に多武峯に向ふ。城島村を過ぎ桜井町の片はづれより小径をたどりて阿部村の石窟をみんとす。例の自称先鋒は何時の間にか。衆と隔りぬ。二路あり。之を廻に問へば右を取るべしと答へぬ。進みて山を下れども更に石窟なし。農夫の曰はく直この山上なりとされど道とてもなし。辛くして橘園を歩いてゆけばいぶせき伏屋あり。其のほとりに石窟あり。窟口とぞすに木柵を以てす。灯火をかゝげて入るに口は広からねども彌進めば彌広く立ちて尚余あり。其の極る所に石棺あり。其の後の片隅は毀たれたり。此は賊の棺内の器物を盗みしものならむ。兎も角も古代諸親王后妃の如きやんごとなき方々の墳墓ならむと井上の師はのたまひぬ。悲しきかな。幾千年の後までも誰の墓なるかを詳にすること能はざること。茲に一の動議は提出せられぬ。曰はく自称先鋒は余り足に任せてせんそく(せんそくは跣足の字音なり。事の迅速なるを意味す。緩慢は字の如し。共にこの旅行中天降りし語)なれば後より来る人にはこよなき不便なり。今少し緩慢にせられよ。又日記の材料も今日より後は一入多ければ緩々歩まるといふにあり。議一決して分れて三隊となり日割をもて日記も委しく書かむとの約束なる。行くこと十余町。道傍地蔵を安置す。石地藏を辿りてゆけば又石窟あり。前者に比すれば構造の一層改良せられたる点も見ゆ。前者は自然石をもちゐたれども後者は琢磨彫鏤ほどよく石を畳み積めるなど其の時代に懸隔あらむといはれき。稍ゆけば尚一あり。其の大なること前者の二

倍もあるべきか。天井石の如き驚くべきものにして中に石像あり。剣を持ちたる形をささめるなり。これ所謂石棺の蓋石に彫刻せむならむと言はれき。傍に安部晴明・仲磨の祠あり。文珠堂あり。宝物を見るに南無阿弥陀仏の六字は弘法大師の真筆とか。其の他に小野道風の筆(此の夕日いたく暮れて宿につきし時は已に八時過なりき。かゝる時に盲目の杖とも頼む手簿を道に落しつ。今は只記憶の俣なり)大般若経其他教多ありたれど其の中の幾部は内務省にをさめたりといふ。又先の石窟は経を埋めたる処にて後なるは晴明の学問所なりと伝ふといふ。これ仏者の常談に過ぎず。大和志に曰はく孝徳紀に載せたる阿陪大臣の墓は是なり。東に荒墳あり。墳上祠を建つ。村民之を祭る。西に円丘あり。土人仲磨の塚といふ。続日本紀に宝龜十年夏四月前学生阿陪朝臣仲磨唐に在りて亡せぬ。家口偏に乏し。葬礼闕くること有り。勅して東施一百疋白綿三百屯を賜ふ。蓋兆塋を築きしは是の時に当るかとおれど如何あるべき。そは兎も角も村名といひ神祠といひ山の名といひ阿部氏に由縁ある旧地なることいと著明なり。全所を過ぎ桜井町を経多武峯村大字倉橋にいたりぬ。山陵あり。傍して崇峻帝倉梯岡陵といふ。周囲百四十余尺。繞らずに木柵を以てす。拜跪して進む。

頼文いはく。倉梯の岡の山陵を拜まむとする道すがら六十路ばかりの翁にあへり。かの翁いへらく此の倉梯の御陵はやく徳川幕府の天の下の政権を執りし頃より弓馬の道もて世に時めけるもの、ふ等は武運の栄えはた太刀打つわざ手力の強くならん事ども祈るとてぬかづきををろがむ者さはなりき。其のまうづるさまはおほかたいさめる駒に鞭うちて五騎十騎などつらなりてもするが常なりき。其は此のすめらみこと手力のいと強くましゝて万たけくを、しくまし、故なりとか。語り伝へ侍りきといふ。其のさますなほにまめだてる口つき都人にまさりてさる方にはなつかしき翁なりけり。猶問はまほしき事もありけるを行李いそぐ旅路なればせん方なく袂をわかちつ。いとあかず口惜しき限りなりかし。あはれ此の天皇命のそのかみ馬子がさかわざ

を憤り給ひこの猪の頸切る如くわがにくしと思ふ人を斬らむとをたけびし給ひけんおほん勢の程をしのびまつるに大方の帝陵はまうづる人もなき世なりしを此の天皇命のみ武夫どもにをろがまれけむ事千歳の苔の下までも猛きを、しき御心はうづもれさせ給はでかしこきみいづ輝かし給ひける御事よといとくかたじけなしかし。かゝる物語はあまねく人の知らぬ事なれば記し添へつ。

時已に正午を過ぐ。頬に空腹をとなふ。是より先多武峯にて昼食せんと的命令下れり。されどはからずも道を失ひ或はあらぬ谷間におち入り又は岐路にまよひ或は廻りに廻りたるなどかたぐ予定の時間に達するを得ず。進まんとすれば尚五十町余ありと。衆議紛々遂に忍びて行く事に一決す。宮島の師は昼飯の支度もあればとて已に数百歩先に進まれぬ。我と高松君とは又も何時しか先に出でぬ。聞き分けなき者どもと人の罵らむもせん方なし。もとより峻坂とは言ふべからざれとも連日崎嶇たる山間を跋涉して足頗る疲る。一步一喘息焦げ舌乾く。ゆくこと数百歩にして宮島の師に追ひしきぬ。殊に宮島の師は旅行中大切の弗箱を提げらる、事なれば他人にまして疲れ玉ひけむと後にて思ひ付きぬ。高松君足に於きては一步も譲らぬ一騎武者。こゝに我は復しらずく競争を始めぬ。其の苦しき事いはん方なし。今八町なりと聞けばまた今廿町許なりと言ふなど実にいまくしき限りなり。ゆきてもく尚三町五町といひていつ着くべきとも覚えず。稍疲る、頃宿屋の番頭は来りぬ。今より八町なりといふ。勇氣百倍駆足をもて進む。四十町四十五町の石榜も過ぎて談山神社に近付きぬ。道に後醍醐天皇の建てさせ給ひし石の灯籠あり。稍進みて紅葉館に着きぬ。館は神社の向にあり。一眸すれば溪流潺湲として迸り崖樹紅黄相交り或は渥丹の如く或は青黛の如く風光明媚眺望絶佳なり。館には皇后陛下の御休憩遊ばされし事ありとか。左甚五郎の龍の彫刻物などちりばめて最風流に造りなしたり。汗は衣を通していとうるさければ湧き出づる清水にて体を拭ひ暫時休ふ程に全隊已に館に着きぬ。今日はかく苦し

且遅くもなりたれば腹もさぞかし空しからむ。わりご早く開くべしとの命下れり。草鞋ときてあぐらかきつ、食ひ且ながめ暫休ひて復歩み出づ。汗にぬれし衣は冷にして着らるべくもあらねとせん方なし。時に二時三十分なり。是よりは岡寺・飛鳥井・橘寺など尋ねて檀原の宮に詣でむ覚悟なり。おもしろくもなき日記二三四枚と下手の長文山鳥の尾のながくしくもかき綴りつ。午後は達筆家の聞えある安藤の君のいと流暢におもしろく書きつゝらるべければおのれはこれにて。

三日午後

本科一年生 安藤 正次

此の紅葉館といふは又の名を花中屋ともいふとかや。春秋の眺めとりくめでたくやあるらむ。さて案内せられたる別宅の方は先つ頃二位の局の休み玉ひし所なり。二階より見いだせばおもしろく造りなしたる庭のさまなるに風にたぐひて紅葉の散りくるなどいと興あり。さてひるげなどしをへていでたつ。

そもやおのれこたびこゝに尋ね来て先驚かれたるは山のけはひのおごそかなるなり。次に目さむる心地せしは満山の紅葉なりけり。されば登り来る道すがら二つ三つうめき出されたる物なきにしもあらず。みちのくなる埋木のいかでか埋れさすべきとて書きつく。

さしてゆくかさゝぎ山の紅葉ばにたびの衣も色かへてけり

なづみゆく木の間に見ゆる紅は峯の紅葉のしをりなるらむ。

此らも旅の興とやいはむ。さて宿をたちいで、御社の方にとむかふ。ながめやれば満山只紅にうづもれて常磐の木々もみえわかぬに中をたちて百三十余の石階ぞ聳ちたる。登りゆく人の姿も錦きてと覚ゆるに紅葉が洞の下かげに酒くみかはず若人の一むれ顔の赤らめるは梢の色うつれるにや。はた酔ひてにや。げにこの紅葉のいみじうてりわたれるに神社はすべて丹塗なれば殊に目もさむるやうなり。まして十三重の塔は高く紅をうがてるを。さて鳥居の前にて修祓す。榊なればとて泉館の君紅葉の枝もてはらへす。御塩は阿知和君なり。しほをいみじう

ふりかけたれば諸人の襟ともいはず耳ともいはず乱れ入りて白き物のつきたる寒からでふる雪ともいひ難くや。阿知和君のほこらしげに打ちいでたるをきくに

常磐なる色ならねどもみちばのあかき心を神やめづらむ

といとおかし。さて石階を登りてをろがみまつる。

蘇我山の嵐しづめて藤波のさかえ久しき神の御いさを

など聞えあぐ。社務所にゆきて宝物拝観を願ふにこなたへと案内せらるればゆく。其の宝物といふものは大凡左の如し。

中将姫の筆といふ法華経八の巻

童子鐘 細帛

信貴山願尊作の筥

光明皇后の筆なる普賢経一卷

金岡のかきたる聖徳太子伝図

狩野光信の新縁起

此の他武具楽器の類いと多かりしかど一々記す暇なかりき。中に雲慶の作りし狛犬あり。こは実物によれりとかいふ。頭つき足つき其のさまざま普通のものとは異りたり。

こゝをたちいで、ゆくに奄羅樹といふ樹あり。この樹は天竺よりうつせるものなりとぞ。大鏡に奄羅といふ樹は花はしげ、れど実を結ぶことはかたしとこそはとき給ふなれとあるはこの樹なり。塔の側より西門にいで、下る。

遙に見渡せば山々遠く連りて限りもしられず。あなたこなたの山本にかれこれ家居もみゆ。黄金の浪よせし八束の足穂も刈り終へたればにや。田畑は黒く打ち渡されたるに蜘蛛手の如く白く流るゝは小河なるへし。

談山より下る事十八町道はしく坂急にして足をとゞむべくもあらず。ひた下りに下り足をいたむる程なるにふみしむる勢頭にひゞきていよゝたへがたし。うねりくゞて下れる所に茶屋あり。一杯の水を甘露とさげびいざやとてゆくにかた

へに鎮守めきたる物見ゆ。何神を祀れるにかと思へばこれなん高市郡高市村大字上にしづまります式内気津和既神社なりける。あないたまし。宮居も今はあれはてて雨漏る軒には霜も置くらむ。風もる戸ぼそには月もさし入らむ。御前の真澄鏡は影失せて光もなく八桑枝に栄えてし榊は枯れて紅葉のみぬさとぞ散りかふる。

千早ぶる神のいがきはあれはて、秋ふけにけり気津和既の宮。

畝傍の山はいと遙に見えて前途ほど遠し。日はすでに三時をすぎぬ。かへり見れば談山いよゝ高し。田畑などの間をゆきて鳥の荘をすぎ岡村に至る。村の中間より右に折れて岡寺にいたる。疲れたる足にてつゞら折なる坂を登る。いとくするし。さてこの寺は東光山龍蓋寺といふ。岡寺とは其の一名なり。天智天皇の二年建立したまへる所にて古より人身二十五度の厄を除くる観世音とてあがめまつる由なり。そのかみ孝謙天皇も行幸ありて落慶の式をあげさせ給ひしほどの寺なればいかばかりきらびやかにけむ。庭前の露は瑠璃の光を放ち軒端には紫雲たなびきけんを。今は仏の光もあせて草葉に露はやどれども昔のあととぶらはむよしもなく破れたる軒は蜘蛛の巣にけがされてすぎし世のあととぶらむればたり。祇園精舎の鐘の声諸行無常とひゞき沙羅双樹の花の色盛者必衰を示す世の中。はかなき浮世とはいひながら仏の衰ふるはこれ当然の事なりかし。この寺を岡寺としも言ふ事は舒明天皇の岡本の宮跡なればなり。さてここを下りて田の畦を伝ひて飛鳥神社にまうづ。この社は式内の大社にませり。催馬楽に

飛鳥井にやどりはすべしかげもよしみもきよしまきさもよし

とある飛鳥井はこの社の鳥居の側にあり。今は水もなくたゞ其の跡のみ草に蔽はれたり。鳥居に入りてゆくに御神竹釣竿とたて札したる一むらの竹あり。いとめづらかなり。又えびす石と称ふる石あり。形の似かよひたればなるべし。さて内宮といへるにまうづ。この所には事代主神・高照光神・建名方神・下照姫命四坐を合せ祭る。中の宮は素盞鳴尊・大己貴神二柱を外宮は天照大神・豊受大神をい

つき祭れり。末社八十ありて皆境内におはせり。同じさまなる御社の立ちならびますこれなり。まうでをへて橋寺にいそぐ。日はや暮れて暮色稲葉にたゞよへり。たはぶれてよめる

日はくれぬあすかの里はたちいでぬ今宵いつこに宿はからまし。

橋寺は仏頭山上宮院菩提寺といふ。橋寺とは其の一名なり。橋村あり。上宮太子の建立せられしなれば上宮院とはいへるにや。橋の宮の旧跡なれば橋寺とはおほせけむ。水鏡推古天皇の条に此の寺にかゝれる事などあれどくだくたくもありかつは要なればはぶきつ。門の右の方に橋あり。左の方に桜あり。それも日暮れたればおほろげなり。さてひたいそぎにいそぐほどにいつしか本道を見失ひたりけむ。山のはざま田畑の間をよぎりて足を早むるほどにやうく本道にいでたり。灯火もなく闇にたどりておぼつかなければ道行く人に尋ねくゝてやうく平田村なる欽明天皇の御陵を拝せり。此の御陵は俗に梅山とよぶとぞ。石の玉垣いとおごそかにて夜目にもしるき白真砂きよらなり。委しきさまは暗ければ見えす。残り惜しき事なり。さて此の陵より右に行くこと一町ばかりの畑の中に皇極・孝徳両天皇の御生母吉備姫命の御墓あり。さまで大きからず。御墓の左右に石人三つ四つならびたり。猶闇をたづねつゝ久米に至り久米寺を左に見てゆく。道三すぢある所に出でたり。いづれにゆかむ。いづれをかたどらむ。おぼつかなきま、杖をたふしてうらぶに中なる方をさしつ。さらばとてゆくにげに畝傍村にいでたり。檀原神宮の入口にて修祓をなし夜もふけたれば遙拝し奉りて天皇陛下万歳を三度唱へぬ。けふは天長節なればなりけり。畝火山のかたはらを過ぎ八丁の道をよぎりて御陵前にいたり福本彌三郎方にやどりぬ。時に午後八時頃なりき。げにこの宿よ。いともあやしげなる家にてゆあみするに据風呂といふもの、朽ちたるやうなりしなどいとあさましかりき。今夜御陵の松風枕にひゞけり。さめやすき夢はいづこをかさまよふらむ。

四日午前

本科一年生 近藤 弘代

朝起き出で例の事しをへて門出せしは午前七時なりき。此の宿は家造りまだと、のはず。浴室厠等は殊に不潔をきはめたり。此のやに御陵の図をひさげり。先之を購ひつ。檀原神宮及び御陵は昨日参拝すべき予定なりしを日の暮れたればえせざりき。今朝参拝せんとする折しも雨はふりきぬ。宿より案内を為しくれたれば導かれて檀原神宮に詣つ。此までは昨夜こし道を戻りたるなり。先神前に至りて礼拝す。境内には池あり。園などはまだ造りと、のへられず。社務所に至り御守札を請ひ序に御本殿及び拝殿等の広さを尋ねたるに神官委しく記せる物持ち出で来て教へつ。生等は之を書き取りたり。本殿は西京の御所なる内侍所拜殿は同じ神嘉殿とて寛政年中樂翁公の造り奉れるを明治廿二年此の処に遷し奉れるなりとかや。畏けれど神嘉殿の如き宮中の御殿としては粗略なるものなり。帰りにて御陵に詣づ。御陵は木柵石柵土堤及び池をもて環らせり。生等は第一の御門を入り次の御門にて礼拝す。

謹みて古史を案ずるに天つ日嗣の御さかえ天地のむたとこしへなるべしとの御詔を受け給ひて天降りまし、は彦火邇々芸尊にましませり。其の後二御代の程は西偏にまし／＼ければすめらみことの御いづ大八州の国内に普からず。処々に酋長ありて互に争へりき。神倭の天皇之を統一せむとおもほして大和に都を遷し給へり。かくて射向ふものは討ち従ふものはめぐみ給ひて平定の功を終へ給ひ即位の大典を挙げて天が下に天位の尊きを示し皇祖天神を齋ひ奉りて報本反始の誠をつくし給へりき。大なるかな帝の御徳。至れるかな帝の御業。天祖の詔を恢弘して皇国の基を定め給ひしは実に此の天皇に座しませり。今日しもこゝに詣で、其の御徳業を仰ぎ奉るはまことに畏しとも畏き極にこそ。

御陵を出づれば前におごそかなる建物あり。勅使の休憩し給ふ所なりとか。再宿に立ち寄る。主人奈良まで送らむといふ。己が組せる宿に連れ行かんとなるべし。されど龍田に廻らむといふ人多ければ其を止めて道をのみ尋ねつ。この処に

大祖教会といふあり。町をはなれてしばし北に行き綏靖天皇の御陵を拝し今井町に至り左に折れて次の村蘇我に至る。このあたりに入鹿の墓所ありとか。右に折れて小槻・太綱等の村を経、百濟・広瀬等の村を過ぎて萱野村に至り櫛玉比売神社の前なる茶屋にて休ふ。時に三橋先生は胃弱にてなやみ給ひたれば井上・泉館の両先生も共に其処に残り生等先立つ。この村をへて川の堤に上りたるに赤き鳥居向ひに見ゆ。弁財天村なる市杵島姫神社なるべし。しばしゆくに右に渡る橋あり。傍に家ありければ河合にはと問ひたるにこの堤をゆけといふ。橋を渡らで行きたるに遙西の方を北に進む二、三人あり。彼等は橋を渡りしなるべし。折しもかなたより来る人にいづれか近きと問ひたるに彼方は近道なりといふ。口惜しけれどせん方なし。堤を下れば川合村なり。この村はづれに川あり。橋を渡りて広瀬神社にまうづ。社は朱を以て塗れり。社務所にて御守を受け料はと問へば御志次第なりといふ。いづれもかくありたきことなり。暫時休息したるに雨はいよくふりまさり足もいと疲れにたれば龍田にゆく事を止め直に法隆寺に向ふこと、しこの社の後なる笠日村に至り物食ひて空腹を補へり。法隆寺までは此処より二十町なりとかや。西安堵村をへてゆく程に三人の先生は車にてゆきすぎたまへり。午後一時十五分法隆寺村かせやといふに着す。前の三先生は待ち居られたり。今日はわりご持たざりければこゝにて昼飯を食べつ。

四日午後

本科三年生 森幹三郎

ひるげをはりぬ。一番に車にて馳せぬけし阿知和君いかゞせしにか。いまだ来らず。先立ちゆきし宇仁・沢田の二氏も見えず。案内の老爺も来たるにいづくをさまよふにかなどつぶやく程三氏は来りぬ。急ぎ立て、出で行く。目ざす所は法隆寺なり。勅願門といふを入れば礼堂あり。本尊は観世音なりとぞ。さまで大なりにはあらねどいたうふりたり。や、入れば夢殿あり。八角宝珠形の堂なり。此も観音を安置せりとかや。推古の御宇淡路の島に流れ寄りたる沈水香を以て聖

徳太子の作り給ひし物なりとぞ。猶言ふやうなれど声ちいさくて聞えず。ひとり呑込顔に案内者先に立ちてゆく。茲に由縁書き付けたる札あり。ながめて手帳に記さむと睨み上げたる吾は一人とり残され塩なめしつゝ、急ぐ。さて次は舍利殿なり。太子二歳の時南無仏と唱へて聞き玉ふ掌の内より出でたる舍利なりとぞ。梅檀は二葉よりかぐはしとはうべもいひけむ。二歳の程よりかく怪しき術行ひ玉ひけむ御方こそいとくすしくも尊けれ。かゝる方便にて欺かれし古の人はいかに正直なりけむ。

廻廊をめぐれば四足門といふあり。門を出づれば早市街なり。思ひの外なる心地せられて案内の老爺に法隆寺は最早これかぎりなりやと問へば老爺訝しげなるおも、ちして此所はまだみ寺にあらず。寺の境内なりといふ。さて其の区域はと問へば八町四方なりと答ふ。呆れたる我が顔のいかにおかしかりけむ。友どちはど、笑ひぬ。誠や市街なりと思ひしはあらず。ことごとく僧坊の立ちつゞきたるなりけり。彼は善住院此は福生院など、て示す。一町余りもやありけむ。門あり。中の門といふ。そを入れば僧房いよくおびたゞし。中には法隆寺役場法相宗勸学院巡查駐在所などいふ札もまじりて見ゆ。其の広さ想ふべし。右手に当りて鏡の池といふあり。さまで大きからず。いかに映りかすると立ちよればいたう打曇れり。それも道理。今日の空の景色を写したれば。

斯くして二王門につきぬ。や、大きな建築なり。いつもながら二王のつらつきはいかめしきものなり。高さ一丈余りもやあらむ。右は赤く左は黒し。手を振り上げたる足を蹴上げたる其のさま之を見なば如何なる妖魔も跣足なるべし。昔唐土にては死人の側に悪獸をふせぐ為とて異様の物立たせたるよしは聞けど仏の門番に仁王を立たすは抑如何なるいはれあるにかなど平田翁の受売説を我が物顔につぶやく人もあるやうに見受けぬ。さて門を入れば右に宝庫中に金堂左に五重塔など見渡さる。中にも宝庫は柱ゆがみ棟かたぶきて誠や千年余を経にけむとおぼゆ。されど瓦のみ近代の物の様なるは疑しといへば其は屢々修繕せし故なり

と案内者はいへり。金堂又ふりたり。昔は四方の柱丸木なりしを中世左甚五郎のゑりたりといふ龍を巻き付たり。五重の塔亦高し。四五丈はあるべし。これ等皆戸を閉ぢたればよそめのみにては飽かず。中には宝物もおびたゞしと聞くを。いかで一見せばやと口々にいふ。さらばとて阿知和君使者となりてはせ行く。やがて一人の僧は来たり。さて見料は幾ばくなるかととふ。学生の事なれば今少しは引けといへば僧これに答へて義侠心としては只にても見せ申さむ。されど堂宇宏大にして中には古よりの珍器宝物多し。これらを保存せむには数多の費用を要すべし。さればこそかくは申すなれ。決して愚僧等の懐を温めむとはあらずと説教口調甘くも十九人を言ひくろめたり。さらばとて従ふ。これより義侠心の一語は旅行の道すがら人々の口の端になむのほりける。

聖寿院の入口にて皆草鞋を解き棄てつ。や、行けばうちはしあり。それ渡れば宝庫なり。戸あけて入る。や、暗し。誠や番僧は居たりけり。左の方に三四尺許りもやあらむと思はる、五重の塔をすゑたり。此は我が国に始めて塔を造る時の雛形にとて百濟より持て来し物なりとぞ。次に屏風あり。光明皇后と弘法大師との書かれたる経切をまぜばりにしたり。下の画は観輝の筆なりとぞ。次に迦葉弥勒の画あり。ともに巨勢金岡の筆なり。猶委しく聞かんとあなたこなたより尋ぬるに僧うるさしと思ひけむ。物知らぬ田舎人などにこそ委しうは申せ。よくわかきまへたる貴君等にはさまで申すまじければ下の札を見玉へといふ顔かへすゝも悪し。次の堂に入れば一入暗し。四方は壁にて上の方に小き窓二つ三つあけたるのみなればよくも見えず。仏像仏具の珍しげなるが多し。つばらに見たらましかば益する事の多からましと思ふもいとかひなし。さて何故にかく暗くはしたるぞと問へば盜賊の恐れあればといふ。偷盜賊を説きて悪人を教化する仏寺にかく備への厳しきはあはれ仏もはや末となりしよな。呵々。

この処見をへたれば此方へとて元の道を過ぎ東堂といふに導く。仏をまつれり。名はしらず。こゝに彼の僧先座して勿体らしく説教を始めつ。さては守札の

一枚も売る下心ならむと見てしかばや、其の場を離れて聞くともなく耳傾く。僧咳一咳とき出すやう偕日清の間もこの頃はいよゝ危急にせまりぬ。されば当寺に於きても戦捷の祈願などをさゝ油断せず。就いては出陣兵士の為に此の度守札を出す事となしつ。こは聖徳太子鎬守護とて其の靈験いちじるきものなり。貴君等にも一枚づ、進上すべければ御遠慮なく御受納あれとて与ふるはひなり。われもくゝとて立ち寄る。今迄しらず顔せしわれも進上の一言にさらばこゝへもとてうけたり。慾界を離れぬ人々と仏の心には中々におかしくや思ふらむ。我に取りては用なき仏札なり。いかなる心にてかうけたりけむ。かくて先の入口に出づ。手に手に草鞋たづさへてゆく。次は金堂なり。南向にて入口に釈迦三尊をすゑたり。此は鳥仏師の作なりといふ。東西にもまつれり。北面の虚空蔵とやらむは北条時頼の寄附したる物なりとぞ。其の他にも仏像多けれどあまりくだくだしければもらしつ。殊に目とゞめつべきは周りの壁にかき付けたる画像なり。千年以前の美術家曇徴が意匠をこらしたるもの。以て当時絵画の如何に進歩したりしかをみるにたる。さて入口の右手に当りて半たゝきにうづみたる饅頭形の石あり。こゝもくらくてよくはみえねど凡半畳敷許りもやあらむ。此は何なるかと問へば僧言ふやう当寺には三伏蔵とてかゝる物三所にあり。されど今其の二所はしれず。此は昔よりありこし俣なり。伝へ云ふ。当寺もし大事あらむにその時聖人出で来て之を聞かば伽藍を再建し仏道を興隆する事を得むとさも得意がほに解き聞かす。そも如何なる妖魔をかひそめけむ。さるにてもかゝるわなにかゝりて誠と思ふ愚民の今も多きぞうたてき。さて今迄は氣もつかで居たりしが僧のいふにふと見やればげに此の堂の柱よ。丸木にて堂の大きさにしては似げなく太きにあけつりしたるまゝにてかなをかけたりとも見えず。俵なりに中らは太く上下はほそし。此の推古式といふとかや。此の堂もはや見をへたれば次に五重の塔に案内す。四面各仏像をすゑたり。又鳥仏師三国の土を取りて作りたるなりとて須弥山の形を模したるものあり。最早これにて案内すべき所も果てたればといふにか

の義侠心の僧とわかれぬ。かくて西の門を出づれば石階あり。此を上れば西円堂峰葉師といふあり。六角の堂にて中に壺丈六尺の仏の座像を安置せり。さて如何なる故にか。奉納物には鏡刀錐の類おびたゞし。大工鍛冶の仏にやなど打笑ふ。こゝはや、高ければこゝ、かしこに立ちつゞきたる僧坊本堂どもあらはにみおろさる。供所といふありて守札画図などをひさげり。我も一枚を求めて開きみれば画いとこまかにて其の始めに

夫当寺は人王三十二代用明天皇即位元年^{丙午}勅願に依て御造宮なる所なり。三箇の鎮壇を地底に構へ首尾十五箇年を経て落成す。蓋皇国勅願寺の権輿なり。殊に伽藍は百済国の妙巧に係り実に海内無雙の古刹にして火災の難なく于今殆一千三百年也云々

としるせり。あはれ妖魔の住へる事かく迄久しからむとは。さばれ。此の建築この彫刻この絵画等はいかに其のかみ丸木もてくみちがやもて葺きたるひき、屋の中にすみし人々を驚かしけむ。さてはいかに蒙昧暗黒の中に眠りし人等の目を覚しけむ。とまれ。かくまれ。仏法伝来と共に我が国の技術に著き進歩を与へたる事はいふべくもあらず。されどこは皮相的の文明なり。形而下の開化のみ。其の精神的のありさまは果して如何なりしか。思へば尊嚴なる我が国体は実に彼等が為に汚されたり。我が国政治の運用上には大なる妨害を与へられたり。其の弊害の存する所をかぞへあげなば小指もそこなはれぬべし。神人の別君臣の分昭乎として変りなき我が国体にきづ、けしものは抑誰ぞ。みだりに客神に礼して畏くも龍体をそこなひまつりし馬子あり。ほしいま、に廟堂に拝趨して帝位を覬覦せし道鏡あり。偕は本地垂跡の説を唱へて神典を乱らむとせし空海あり。古より定りし神の御地を移して仏を祭りし最澄あり。行基玄昉菩提仏哲の徒これ等皆同じ穴の貉にして其の及ぼし、弊害は数ふべくもあらず。数多の貴族は戒を東大寺に受けしにあらずや。かしこくも一天万乗の大君にして御みづから三宝の奴と称し玉ふにいたらせ奉りしにあらずや。宏大なる土木は年々増加し人心は一般に懦弱に

流れ財帛は空耗し民力は疲弊し延きては武門の専權となり保元平治承久の乱は実にごゝに基したりしなり。嗚呼宗教の弊ほど恐ろしき者はあらじ。聞く。欧州強国が他国を征服せんとするに当りては先其の宗教を以て敵国の人心を感化し之に繼ぐに干戈を以てすとかや。今我が国のありさまは如何に。西洋各国との交通開けし以來此に三十余年。百般の文物制度に於きては一つも欠くる物あるを見ず。皮相的の文明に於きては己に具れりといふべし。さて精神的にいたりてはいかに。彼の基督教の勢はいかに。内地雜居も近きにあらむを。思へば我等国学者の心すべきは先こゝなりけりなど万感胸にあつまりて思はず目つりこぶし握らるゝ程不意に背中を打つ者あり。人々は早下りしにいつまで何をながむるぞと言ふに打驚けば誠や思に沈み居て独とり残されしなりけり。急ぎ下る。二、三町走りて追ひしきぬ。案内の老爺は元の道に余等は南大門を出で、松原にかゝる。法隆寺駅より汽車に乗らむとてなりけり。此処より十町許りなりと聞く。皆々乗りおくれじといそぐ。ぬかりみに足踏み入るゝもあり。泥はねあげてつぶやくもあり。とかうして今三町ばかりといふほどにきとかなたを打見やれば南無三。時機已におそし。汽笛一声煤烟空を横ぎりて轟々たる響と共に進行を始めたなり。停車場につきし頃には一抹の烟遠く名残をとゞめたる外影だにとゞめず。悔むもせんなし。さらばとてこゝに最後の発車を待ち合する事とはなりぬ。待つ身はつらしとてべもいひけむ。一時間あまりの程長しとも長し。かゝる程に短き秋の日かげとて早かなたの山より暮れそめて見るが中あたりや、暗うなりぬ。山寺の鐘もひゞき家々のあかりもともりたる頃やうやうに汽車は来りぬ。皆々打乗る。鈴はなり笛はひゞきぬ。車は徐々と回りそめたり。田やゆきし畠や去りけむ。山や飛びし川や来にけむ。暗ければ見えず。たゞ轟々と闇にきしる車のひびきを聞くのみ。三十分ならずして郡山駅を過ぎ奈良に着きぬ。車を下りてたどりゆくほどに宿よりのむかへにあへり。雨已に晴れたれど道いとわろし。つかれはてたる足には五、六町の宿もなかゝ遠き心地す。やうやうにしてゆき着きぬ。やゝ大なる家

にて軒の行灯にかまやとせるせり。いとうれし。草鞋とく間もどかしくいそぎ上りぬ。先湯に入りて疲れたる足なでなどず。此の宿にて我々の目に珍しく思はれしは電気灯なり。田舎者のかなしさ。話しには兼ねて聞きたれど見るは今が始めなり。さればあやしむもあながち無理ならぬ事ながら如何に此の灯のまばゆさよなどいひつゝ、畏るゝ指もてホヤを撫で、ここの下婢に笑はれたるはいとはづかしかりき。かくて食事も終へつ。つかれたれば物みるはあすの事として今宵は早く眠らむといふもあり。又打つれだちて出で行くもありき。余も二人三人とたちいでたりしがこの宿屋のわたりこそやゝにぎはひたれ。他は已に戸をさしたるあととなればほいなくてかへりぬ。かくて夢路にたどり入りしは何時なりけむ。

五日午前

本科二年生 館 信 磨

鹿の鳴く音に驚きて頭もたくれば窓もる透影いとくらし。明方にはまだ程あるにや。うまいの鼾もいと高し。かくてはとて又まどろみぬ。程なく人の起きいづるけはひすれば我も臥戸を離れたり。今日幾日。指をり数ふれば早五日とぞなりにける。空の景色昨日にひさかへていとどかなり。例の事し終へて八時漸く旅の宿りを出でたつ。奈良の名所を尋ねむとてなりけり。抑この地には如何なる歴史か有らむ。地京坂に近くて交通の便よければ各所の物品皆こゝに輻湊す。されば何心なく見たらむには唯繁盛なる市街とこそは見えぬ。されど二千余年このかたの我が帝室の歴史を思はゞ、其の感慨は如何に。率川の宮のありし所はいづこ。桓武天皇都を今の京に遷させ玉はざりし以前七御代の天皇はいづくに都し玉ひけむ。且藤氏のいつさまつりし氏神の鎮ります所藤氏の檀那寺を建てし所はいづこ。山川草木つづいていさごも皆夫々に歴史もたぬは稀なるべし。偕もゆかしき所よな。ある人の歌に

かぎろひの春にしなれば春日山三笠の野辺に桜花木のくれがくり貌鳥はまなくしばなく。露霜の秋さり来ればはか山飛火のたけに萩のえをしがらみち

らし狭男鹿は妻よびとよめ山見れば山もみがほし。里見れば里も住よし

など読れたるもゆゑあることなりかし。然れば奈良朝の歌よむにつけ文見るにつけいとゞこの地の慕はれていかで一度はと思ひつゝ、ここに数多の年月を重ねつ。今はこの思ひを遮り留むるものなく今日かゝる名所を尋ぬる事を得たる嬉しさよ。しかも我一人のみにあらず。十八名と之を共にす。嗚呼何の宿世ぞ。誰が与へし幸福ぞ。たゞちびれたる我が筆先にはそのかたはしをだに写しあへぬぞ意ゆかぬ一ふしにはありける。旅館よりすこし行けば道の右に池あり。これなん音にきける猿沢の池なりける。うち具したる案内者が得意顔にいひのゝ、しるをきけば『へ。御一統様に申し上げます。此の池は誠に不思議なる池で御座りまして池の水は増しもせずへりもせず澄まず濁らず出ず入らずと申して』など首うちふりて語る様なりけり。衣かけの柳は池の汀にあり。うつれる影は眉の如し。采女の入水せしはいづこぞ。うつらぬものはすぎにし面影になむ。大和物語に

わきも子がねくれた髪を猿沢の池のたま藻と見るぞかなしき

といふ歌をのせたり。入水のことまかの文にくはしければこゝにはいはず。采女の社は街道の左にて今は町家の右に建てり。社の後に鳥居の立てるはと問へば祠を立つる位置の無かりしかばかくはしつるなり。池を恨みたればかく立てたるなりといふは違へりなど例の案内者がいふさもありなむ。この池の北は興福寺境内なり。興福寺は七大寺の一にして世にその名高し。この寺の起りし由来を尋ねれば天智天皇の御宇大織冠鎌足公山城の宇治郡小野の郷に寺を建てられたり。山階寺といふ。御代変りて天武天皇の御時此の寺を大和の高市郡飛鳥にうつして厩坂寺といへり。其後和銅三年の頃この春日の地に移す。淡海公堂塔を立て生の子の八十継ぎゝに至る迄天皇が朝廷に仕へまつりておのが家も千代万代にとみ栄えよとのねぎごとより興福寺と名づけられたりとぞ。今の興福寺は即これなり。世に春日寺ともいふ。藤原氏の檀那寺なりけり。藤氏の末の世を慮りし事誠に周到なりといふべし。境内は四町四方宗旨は法相宗なり。建物には金堂・東金堂・南

円堂・北円堂・五重の塔・三重の塔などあり。其の外名のみ残りて今無き物多し。凡て此等の建物はいとふるくして皆よくしつらひたり。五重の塔は高さ十五丈計りあり。昔は七堂伽藍建ち列りていとうるはしかりしかども火の禍に逢ひてやけうせればそのかみの建物今は一も残らずとぞ。現今の建物は大方五百年前の物なり。其が中にもいと古く見えしは北円堂なり。こは後冷泉天皇の永承の頃物せしなりといふ。是等の堂塔に安置せる仏像は皆木像のよし。是のみは火災に罹らず。そのかみのまゝにして妙作殊に多しとかや。上代美術工芸の如何ばかり發達せしかを窺ふに足るもの多かるべし。いとまなければ見ずて過ぎぬるこそ口惜しかりしか。東金堂の傍に奈良県庁あり。九重に匂ひけむ八重桜は奈良師範校の門内にあり。範校は県庁の隣なり。

如何に世は移りゆくとも八重ざくら昔ながらになほ匂はなむ。

あはれ八重桜色は変らず花はさくとも世の移りゆくまゝ、にかくなりはてしこそいとつらからめ。そも大輔の霊いづくにまよふらむ。こゝを去りて菩提院を申ふ。興福寺境内の右傍にあり。壁おち軒かたぶきて柱も朽ちたれど修復せず。いたく荒れはて、見るかげもなし。書かまほしき事あれど俗説のみなれば爰には漏しつ。院より一町計りゆけば大なる朱の鳥居あり。春日神社一の鳥居なり。まづ目を驚かししは大鹿小鹿の群なり。ふり立てたる角は冬の枯木の如くはふ蔦のおのがむきくこゝ、かしこの芝生にあさりす。御社までは皆かくの如し。聞きしに増りていと多かり。人馴れたればにや。吾等の左右により来ぬ。いとらうたし。餌を手に取りて与へあるは投げやりてとらするも一興なり。一の鳥居を打過ぎて行くての左は其の名も高き春日野なり。

少女等が袖ふりはへて春日野に若菜つみてしあといつこぞ。

腰折と野守が笑ふらむはしらず。猶ゆく程に小き橋あり馬出橋といふ。若宮祭の夜流鏑馬の式あり。その折この橋より射手の児が馬を乗り出すによりかくなむ名けたるとぞ。

千早振甲斐の黒駒ひきよせて乗手いさむる春日野の原

と射手の児等を詠める歌も物に見えたり。橋の左に若宮行宮の跡あり。御祭のをり仮殿をこゝに営みて若宮を渡御しまゐらする処なりとぞ。常は宮居もなくなつ、おけるものは芝生の露のみ。帝国奈良博物館は春日野のほとりにあり。馬出の橋をうち渡り雪消の沢を右手に見て鹿の林をかきわけてゆくての道の右左にならびて立てる石灯籠心もそらに目もあやなり。うち眺めつ、行く程にいつしか来けむ。車舎（こは貴人の参詣せむ折下乗して車を宿しおくべき所なりとぞ）二の鳥居を打過ぎて盤水のほとりに来にけり。こゝにてまづ手を洗ひつ。その左に瀬織津姫をいはひまつれる祓戸の社あり。皆ぬかづき奉りて身のまがを祓ふ。大鳥居より二の鳥居までは七、八町もあらむか。たゞ見ゆるものは立ちならぶ石灯籠とうち群れ遊ぶ大鹿小鹿とのみ。あたりを覆ふ老松古杉神さびて社域をかこみ春日の奥がは窺ふべくもあらず。城内八十五町計りといふも偽言にはあらざるべし。着到殿は祓戸の社の右手にあり。大宮祭の時勅使の着到し玉ふ所なりとぞ。殿はうるはしき方なるべし。猶一町ばかり行けば朱塗の社あり。これなむ若宮の鎮ります社なる。こを左に見あげや、進みて拝みまつりしは三十八ヶ所の社なり。こは春日山に鎮ります撰社末社の神々を合せまつりし社なりとぞ。さて元つ道に帰りてぬかづき奉りしは若宮の御社なり。天押雲命をいはひまつる。御社の前に神楽殿あり。殿には歌仙の額面をかゝぐ。画は後光明天皇の宸筆にしていとまかしこきものぞかし。神楽を奏して学の道の功を立てしめ玉へと折りまつる。舞は御巫舞とて玲瓏なる琴の響につれて鈴ふり舞ふをとめ声高らかに歌うたふ神づかさ皆けうらなり。目は舞姫の方に耳は琴の音の方になびきぬ。

若宮のみかげうつろふます鏡くもりあらせずかへりみたまへ

とは神つかさのうたひしうたなり。御酒いたゞき終へて大宮に詣でぬ。うるはしく細やかに色どれる樓門は人皆の目を驚したり。こは大宮の南門なり。厳にとりかこめる朱の廻廊にも亦一驚を喫したり。南門の西の方に慶賀僧正内侍の諸門あ

り。構造美麗南門に同じ。昔は諸門皆鳥居にて廻廊は瑞垣なりしが今を去ること七百年ばかり前よりかくは改め営みたりとか。南門を入れればやゝ距りたる所に又うるはしき樓門あり。中の門といふ。御本宮はこゝよりぞ拝みまつるなる。社頭を見上ぐれば二階の樓門三の廻廊いかめしく四柱の社は神さびておはす。宮もとゞろに響く八平手の音に神の御稜威をぞ仰きまつる。斎き奉れる神は武甕槌神・経津主神・天兒屋根命・姫神四柱におはします。この四柱の神たちは三笠の山の下つ磐根に宮柱太しりたて高天原に千木高しりて神護景雲の昔よりぞ鎮りませる。爰にかく鎮めまつりしは誰ぞと尋ぬるにこも藤原氏にして四柱の神たちは其の氏神にぞおはする。春日の社と藤氏との關係を論はばいとをかくあやしきふし多かりぬべし。されどこゝには略きつ。物せむ折は又もあらむかし。幣殿・直会殿・移殿などは中の門の左にあり。結構壯麗秀筆に写さるべくもあらず。其の外いさ、けき社数しれず神さび立てり。こゝ、かしこ眺むる程に井上教授の来よくと招き玉ふ故何事と尋ね参らすれば宝物の拝觀を許されしなりと答へ玉ふ。これ井上教授は当社の禰宜大東延慶氏と知人にておはするが故なり。宝物の陳列せられたる所は中の門の左なる廻廊内にあり。其の重なる物は將軍綱吉公の奉納せられし神功皇后三韓御征伐の御弓矢の模作。弓は桑樹にて作れり。義家朝臣の納められたる甲冑・義経の甲冑・南朝名臣の佩きける太刀・楠公の奉られたる甲冑・其の他舞樂の諸具などなり。大東氏は懇に我等に示されぬ。拝觀し終へてその厚意を謝し内侍門を出で、社務所・皇典講究分所等を右に見て水谷の社に詣でぬ。鎮ります神は素盞男尊・奇稻田姫・大己貴命。境内もいつしか過ぎけむ。やゝ進めば行くての右に山あり。若草山といふ。見あぐる限り八千草生ひ繁りていとよき山なり。世に之を三笠山といふ。そは三山並び列りて恰三箇の笠をうちふせたらむが如き姿なればなり。真の三笠山は春日の神の鎮ります山をぞいふなる。山の様を見むとて宮島教授及び高松・大塚・沢田の三氏は登山せられたり。吾は足の痛みたへがたければ得登らず。こは吾一人のみにもあらざりき。旅の空

にて口惜しくもうれたくもあるものは足の健ならぬ事にこそ。山の麓に三条小鍛冶の流なりとて刀剣をひさぐ家あり。案内者の誘ふまゝ、一同も入りて刀剣を見る。剃刀・小刀など買ふ人もありき。手向山に詣でむにはいとよき中やどりなり。この家を立ちいで、手向山八幡宮に詣でぬ。山に登りし人たちはまだ降り来らぬにや。はた先に行き過ぎしにや。影だに見えず。旅の空とて吾等も幣はとりあへざれば紅葉のにしき神のまにくとてたゞおごそかに拝みまつりつ。菅原の大臣の昔もおもひ出でられておかし。御社には仲哀天皇・応神天皇・神功皇后・仁徳天皇ぞ鎮りませる。仲哀天皇・神功皇后は一の御社に鎮りませり。凡て三社並びてぞおはします。御社の後は手向山なり。今日の一行の人々の峯の紅葉にきそひあひて織り出したる言の葉の錦も多かりけむ。またその心々に見聞しておもひうかべる懐古の談話もさはなりけむ。おのれは足をいたためて常に人々にも立ちおくれがちなるにけふの日記の当番にあたれるからに材料をとそのかたざまにのみ心とられたるけにや。皆き、漏したるはいとく口惜しうなむ。

同じさまの事のみ書き連ねむはわが本意にもあらず文法にもそむきぬべけれどいかゞはせむ。今少しこゝに書きたすべし。偕かの手向山より北の方は東大寺の境内なり。境内は八町四面なりといふ。この寺は聖武天皇の御本願にて良弁僧正の開山せし寺なり。昔は興福寺と並べ称せられきとぞ。職原抄にはこの寺の造寺使といふ役も見えたれば古は極めて盛大なる寺なりけむかし。こもまた七大寺の一なり。宗旨は八宗兼学なれど華嚴を旨とせり。建物いと多し。そが中にも二月堂・三月堂・大仏殿等は人皆の口に膾炙せられたり。二月堂の十一面觀音は大仏に次ぎて世に其の名高く信仰者常に絶ゆる事なし。これかれの堂宇を巡り見て鐘樓の下に至りてしばし休ひぬ。樓内には雜菓を商ふ店もありき。樓につるせる鐘いと大なり。高さ一丈三尺余徑厚之にかなへり。本邦第二の大鐘にて千二百年前の古物なり。一撞一錢なりといへば大枚一錢は惜しけれどもこの鐘の音もきかまほしくて遂に一同は引綱に手をかけたり。さすがは大鐘。五人十人力を合せて天

も落ちよ。地も裂けよと計り一二三と諸声出して手綱をはなてばゴーンと音して百雷の一時に落ちかゝりたらむが如くひゞき渡りぬ。吾等の声は鐘声と相和してしばしはなりもやまざりき。この面白さにほだされて二つき三つきはては六度までも打ちつきたり。鐘声やきこえけむ。かの山に登りし人たちは大仏殿の方よりはしり来ぬ。この人々のにくらしきまで足の早く健なるには驚かぬものもなかりき。是にて皆うち揃ひければ大仏殿の方へと進みよりたり。大仏は大物よ。宝丹などの用意と舌滑にすべらせ出したるは福舎君なり。百も承知と万金丹さし出して福舎君に示したるは我ながらおかしかりき。長き廻廊をふみ越えて大仏殿の前にいでぬ。吾さきにと入るを争ふ。その折しも青々と頭光らせたる僧侶二人入口を守りていざ拝観料をと吾等を引きとめたり。吾等は修学旅行のものなればといへど保存の為なればといへばいふがまゝに見料出して入りぬ。御一統様に申上げますと舌がるに又もや口すべるは例の案内者なりけり。されど彼が口上は耳にも入れず。見上げたりく。うなじのたゆみを覚ゆるまで大仏の形を見上げたり。万金丹の必用は無かりしかどもさすがは大物。吾等は眼下に見下されたり。座像の総長五丈三尺余ありとぞ。耳目鼻口より指の長さに至るまでこまやかにかき記したれど何やらむの寸のみなければかの川柳点に見あらはされけむとおかしう覚えぬ。其より大仏の周囲を巡り且は堂の構造を見る。つきたてる柱は両手にてはかこみ兼ねたり。太きはおよそ二抱もあらむか。堂の高さは廿四五間広さは東西二十八間南北二十六間計りなりと聞けり。金銅の盧舎那仏を安置せるかゝる大堂も火の神のすさびには如何ともしがたきにか。三度まで焼けうせたりとなむ。今建てるは徳川將軍綱吉公の物せられしなりとぞ。されど盧舎那仏のみは千二百年前の遺物なり。いくそばくその金銀をなげうち幾年月を費し、か。五丈にあまるこの仏を鑄造りしこそいともかしこき業なりけれ。この座像を眺めて誰か其のみ美術工芸の發達せるに驚かざるものあるべき。本邦の美術工芸世界に冠たるも今日に始りたるにはあらずかし。此の大仏こそ聖武天皇の御願にして行基法師に

勅し玉ひて建てさせ玉ひしものなれ。思ひ出せり。聖武天皇一天万乗の御身を持たせられ盧舎那仏の前に跪きて三宝の奴とのたまひきと聞けるはこの入仏供養の時の事なりけり。古学びする吾等が耳にはきくもいまはしく口惜しき事なりかし。おのれ盧舎那仏。其のかみの美術の發達を今の世に示すとはいへ。原を尋ねれば天竺の蕃神寄留の身もちて畏くも天皇に奴とよばせ奉り内外尊卑をもわきまへざるにつくき五丈の盧舎那仏。奈良朝の恥辱は奈良朝の恥辱のみにはあらず。おのれありて後世の恥辱。にくさもにくし。この盧舎那仏。覚悟致せと鉄拳はにぎりたるもの、五丈に余る大仏はわれを眼下に見おろしたり。いかにとも詮方なし。本地垂迹の説をとへ愚民はおろか。天皇の御身まで線香の煙にまよせ奉りしおのれ行基と心には怒れども千有余年前の人の面かげはいかで今の世にのこるべき。思へば血の涙もいでむばかりなり。偕昼飯の時刻にも近よりぬればこゝいでて正倉院へと志す。大仏殿より正倉院までは二町ばかりなり。こゝは聖武天皇の愛で玉ひし御手道具どもを納めたる御藏なり。世に名高き蘭奢待も此の院の裡に納まれりとぞ。勅封なれば妄に入りて見る事を得ず。警衛の巡查に一礼し門内に首さし入れて院の立てるさまのみをのぞみ見つ。院を囲める四方の高塀も厳に見受けられぬ。千有余年以前の美術品の納まれる所なればかくとり扱はれむも理なりかし。時に時計は十二時を報じたり。案内者にはこゝにて暇をやりたり。三橋教授は不快にて釜屋に帰り玉ひぬ。いと口をし。井上教授と阿知和ぬしとは石の上ふるの社にまうでむとて之もこゝよりわかれ玉ひぬ。あとに残れる十六名はさく花のつぼみにふほが如く盛なりし奈良の都の跡を尋ねむと志す。朝めしは食前方丈備後畳に座をかまへしわれ等も昼飯には正倉院高塀の下なる芝生に足なげ出してわりご開きたり。香の物二切梅干二粒の外にはにぎりめし三つ。水なし茶なし。唾にまるめてかみ下す。咽のくるしさは何に譬へむ。苦しき声にて背撫で玉へといふ人もありき。さてもうつろひ変り易きは人間の栄枯。まのあたりのわれらが身にもまづ思ひしられたり。

因にいふ。石上の一行は山辺郡石上神宮に詣で、神宝を拝観し車いそがせて旅亭にかへられたりとぞ。道のついでに元興寺の塔・帯解寺の帯解地藏・在原寺の業平遺跡・柿本寺の人丸塚・遍昭が遺蹟・良因寺の素性が石塔など訪はむ予想なりしかどきはめて急ぎしかばみな見もらしたりとていと残り惜しげに語られき。この残りをしく思はれしを得ゆかざりし我々の心地よしと思ふも人わろのわざや。

五日午後

本科一年生 松本 昌三

春日の神奈備に藤氏の盛時を思ひ金銅の盧舎那仏に光ありし御代の昔を忍び二月堂・三月堂に足をとめて咲く花の匂ふが如き春の世もつれなき嵐はのがれ難きを感じ正倉院のついで芝生に昼げのわりごをひらきてこれより御代くの陵古き都の跡吊はむとす。

景清門をいでて驚きたるは佐保川なり。千鳥やなくらむ。蛙やうたふらむと思ひしはあやな。流は絶え土橋は傾きて文字をとめたる木標は旅人の袖うるほす媒となりぬ。あはれ淵瀬の常なきは飛鳥川にも限らざりけりと吾みやび男ならねど旅衣の袖をぬらして一滴の涙を手向け行きて法蓮寺村なる聖武の御門の佐保山の南陵に詣づ。延喜諸陵式に兆域東四段西七町南北七町守戸五烟とあり。光明皇后の佐保山の東陵右にあり。式に兆域東三町西四段南北七町守戸五烟とあり。走りて法華寺に至る。昔光明皇后の誓願もて建立せられ墾田一千町を賜はりしこと紀に見えたり。をばしまの擬宝珠に豊臣秀頼が御母寺にて慶長六年辛丑の九月片桐東市正且元奉行して建立したる由記せるは中つ世に焼けたればなるべし。其の代にはいかにうるはしかりけむ。今は荒れはて、読経の声もきこえず。香の煙も絶えたり。水上の池堤を歩み仁徳天皇の太后磐の姫の陵に詣づ。周囲五百三十九間。阪の上の山陵と申しまつる。筆を走らしてその様を写し池の西をつたひて平城帝の阪の上の陵に詣づ。式に兆域東西一町南北一町とあり。次は垂仁帝の太后

日葉酸姫の陵なり。狭木寺間陵と申して其の地の字を御陵といふ。次は成務帝の陵なり。狭城盾列池後陵といひて字を石塚山といふ。山陵村の東に在り。式に兆域東西二町南北三町守戸五烟とあり。次は孝謙天皇の御陵なり。高野陵といひて字を高家といふ。西大寺の東北。式に兆域東西五町南北三町守戸五烟とあり。池に冬枯の蓮風に破れてうかべり。去りて南に走り伏見村なる西大寺に至る。孝謙天皇の勅願もて天平神護元年に建立せられたる伽藍なり。本尊は丈六の観音にして洛陽より移し、ものとか。四天王は天平神護元年の鑄造にして増長天の一は高野の帝御みづから造らせ玉ひしものといふ。やがて伏見村字菅原に行き菅原神社を拝む。いとさ、やかなる神なびにます。避雷の御守数体を受け宮人の教へしま、大臣といふ処を見むとてゆく。大臣とは右大臣が誕生の旧跡を村人の呼ぶ名なりけり。社より程遠からず。道の傍に在り。めぐり十間もあらむ。池に鳥を造り碑を立てたり。松と梅と桜とを植う。梅王・松王・桜丸にならひしなるべし。松は常磐の色かへず梅は操を失はずして匂香ばし。桜はそのをはりをいさぎよくす。世にありては心を合せてその君を護り死にての後は枝をかはして長く其の御墓にさもろふ。噫松梅桜その池水に影をとめて長く臣たるもの、鏡となれり。この里ふるく菅原伏見の里といへり。菅公の遠つ祖土師宿禰が住ひしは此の地なり。安康帝の陵は宝来寺の奥にあり。遠ければ遙拝して過ぐ。田部親王の御墓は右にありといへど道のついであしければ直に垂仁帝の宝来山菅原伏見の東陵に詣でぬ。わたり五町にも余れる池陵を周り二つ三つの小島を浮ぶ。桜の樹道の左右にしげれり。畝火山の陵につぎて壮大なるものなるべし。式に兆域東西二町南北二町陵戸二烟守戸三烟とあり。かくて齋音寺村を去り三群四群おくれ先ちつ、招提寺にゆきぬ。聖武天皇の御心をもて天平宝字三年建立せさせ給ひし所なり。金銅丈六の釈迦仏は御光の表に千体の仏をさざみ裏に二千の仏体を画けり。南都七大寺の一にして火にかゝりたることなし。樓門の額は孝謙天皇の宸筆なりとぞ。寺傍にあぜくらあり。さきに井上先生本堂の瓦は極めてふるきものなり。うつし

おけといはれければ手帳を出してかきつく。再走りて薬師寺に至る。この寺は元天武の帝造宮の詔を下し給ひ持統のみかど十一月八日高市郡岡本に建て給ひしを元正天皇の養老二年平城の右京六条二坊に移し玉へり。即この地なり。本尊は海内に類なき名作といふ。六層の塔あり。天平二年の建立にかゝる。堂前に仏足石あり。高さ五尺広さ一尺五寸厚さ二寸。大きな足あとを多りて和歌二十一首を添ふ。その一は

拾遺

三拾あまり二のすがたつたへたるむかしの人のふめる跡ぞこれ。いかばかり重き身なりけむと笑ひて郡山に向ふ。

いでや。このあたりこそ昔寧楽七代の花とうたひし古き都の跡なれ。かの大厦高樓軒をならべ大宮人の袖をつらねて往きかひし大路小路は草生ふる径となりて一条より十三条までの街は僅に里の名に残れり。公屋茶屋二条茶屋はあれど茶売る媼もなく杖をとむる宮人もなし。東は佐保川より西は郡山に至る茫乎たる一带数里の地はげにやいらかの浪うち民のかまどのにぎはひし所なりけむ。偕も暮れゆく秋の淋しさはいづこも同じことなれど昔忍ばるゝふるき都の跡にこそわきて深く覚ゆれ。木の葉を散らす秋風に招くは尾花か。はたすゝきか。老いたる頭ほにあげてさしまねけど人は訪はず。霜かれたる草葉の蔭より人まつ虫のかれぐに鳴くはうき世を秋とやかこつらむ。

青丹よし奈良の都は咲く花の匂ふがごとく今盛なり。

世の中を常なきものと今ぞしる奈良の都のうつろふ見れば

など口々にうち誦しつゝ、行けば立ちこむる霧を破りて響くは諸行無常の鐘の音。いづこの山寺にてかつくらむと見やれば日は仁其山の麓に沈みてあかねの空に二羽三羽の鳥つれだちてかへりぬ。かなたの森のねぐらにやいそぐらむ。遠山もとの闇はやう／＼に広がりてこなたの林もはやくらし。をちこちに立つ夕げの烟は空にきえて暁空の、こんの星のやうなる灯火の影さへもりくるに心細くていそ

げ／＼と郡山にかけつたり。直に停車場に至り汽車にて奈良に入り林小路町なる開化天皇の陵に詣で午後八時宿にかへりぬ。

六日午前

本科一年生 沢田 米吉

一眠りしたらむと思ふ程夢ははしく破られぬ。何事にかと聞けば鹿のなきたりとて人々のいひさわぐなりけり。春日あたりならむといふ声す。われも聞きぬ。われは夢のうちにてなど云ひしらふ。あなかも。よしなき事にたちさわぐ人たちよと頭ひきいれて今一寝人と思へどかひなし。とかくするほどにはや空は白みそめしなるべし。厨の方もさわがしうなりぬ。はしため等の起き出で、朝げの用意始めしなるべし。戸あくる音向ひにも隣りにもおこりぬるは全く明けはなれたるにや。折しも柱時計のなるを聞けば五時なりけり。奈良の早起とはかねて聞き及びたれと思ひの外なる心地せられたり。人々の声もをさまりぬ。再夢路にたどり入りしなるべしなど思ふほどにわれも又まどろみぬ。おきよ／＼の声に驚きし頃は夜全く明けはて、皆すでに起き出でたる後なりけり。さてもねすぐしけることよとて急ぎ床収めさせつ。ほどなく朝げもをはりぬればいざとて出で立つ。時に七時なりけり。

今日は空のけしきあやしげにて雨さへそぼふれり。蝙蝠傘さしかざして三人四人づゝ連立つ。猿沢の池に名残を惜みて今日九重にとよみけむ八重桜をいくたびとなくかへり見つゝ、行く。奈良坂を上れば右手に長屋やうの物あり。光明皇后御浴室の遺趾とふだ立ちたり。三間に十四・五間もや有らむ。いと荒れ果てたり。二、三町も来たらむと思はるゝ、右傍に般若寺と云ふ有り。治承の乱れに兵火にかゝりしかど門と経蔵とのみは残りたりといひつたふ。扁額の三字は嵯峨天皇の宸筆とも又空海法師の筆とも云へり。定かならず。抑此の寺は三十五代舒明天皇の勅をうけて高麗の慧灌法師般若台といふを造れり。其の後聖武天皇の御時伽藍となり般若寺と改む。前なる十三重の塔はおなじ天皇の御建立にかゝれり。岩淵

寺勸操僧都之を作る。高さ五丈余。中には天皇宸筆の紺紙金泥の大般若經一部を、さめたりなど云へり。又大塔宮の此の寺に忍ばせたまひしをりひそみかくれて危難を免れたまひし経櫃ありと聞けど見ず。門を出づる頃師の君たちの来たまへるにあへり。かくて八、九人となりて共に急ぐ。先手の人々は早速く行きしなるべし。こゝはすでに町のはづれなり。やゝゆくほどに道左右に分れたり。右は笠置道にて左は京道なり。近しと聞きて道を左の方に取れり。前の人々におひしかむとてなりけり。傍に木標あり。大和山城の界と記せり。又道二つにわかる。こたびは右にとれり。やゝ行きて山路にさしかゝれり。行く事一里余り笠置への本道に出づ。かなたよりこし人にわれゝゝ如き様したるものにあはざりしかと問へばあへり今すこしさきにてと答ふ。行き越されしをくやめどせむなし。こゝは相楽郡梅谷村と云ふめり。師の君たちはこゝの茶屋にてやすらひたまふ。われらは急ぎて先手の人々に追ひしきたり。此のあたりはおかしき所もなし。式内加茂神社にぬかづく。かくて木津川のほとりに出づ。わたし舟にて向ひの岸にうちわたる。後にてきけば笠置への本道は彼の岸の山ぎはなりとかや。すべて此のあたりの山のけはひ川のけしきいとおもしろし。一里余りの道は知らぬ程に過ぎたり。しばしかたへの茶店にいこひてあるじに笠置寺まではこゝよりいかほどあるかと問へば此の川あなたにて凡そ八、九町もあらむといふ。用なき川渡りせし事よとくやみて再かなたにわたる。山影の細き道なり。程なく笠置村に入りぬ。空はいとようはれて風少し吹き出でたり。かゝるほどに川を渡らで山ぞひの道をたどり来たまへる師の君にゆきあひぬ。いでや昔のあと吊はむとておのもゝ傘を杖にして笠置の山をよぢ登る。坂は板を立てたらむやうにて二、三町の程は鼻も地につかむ計りなりき。左に曲り右に折れつゝらをりなす八町の急坂をあへぎゝやうゝのぼりをへつ。滝なす汗は衣をとほしてしとゞになりぬ。松の雫も半置きそへしなるべし。さるにても思ひやらるゝは元弘の昔なりけり。かしこくも一天万乗の大君にましくゝてある時は西海の波に御心をくだかせたまひさて

は此の山の松吹く風に御夢をおどろかし給ひけむ事よとおもへばいきどほろしき事かなしき事など胸にせまりそゝろに涙ぐまれてわれしらず袖はいやそほちにそほぢぬ。小高き所の松が根に腰うちかけてあたりの景色打ち見やる。峻山左右に聳えて天然の險とはかゝるをやいふべからむ。こゝの谷かけかしこの山の端に木々のもみぢの目もあやに錦おりかけたるは其のむかし四十九の僧坊が兵火にかゝりけむもかくやとおもはれていとあはれにはらわたもたちきらるゝ心地す。誠やこゝは行宮の旧趾といへど今はたゞ僅に一堂の残れるのみ。しばらくして師の君たちも登り来ませり。茶などこゝの僧に乞ひ受けてひるげをへつ。こゝの寺の下仕などにやあらむ。物など運びあたる僧あり。ほどよくもてなす。此の僧丈たかく眼大きく其の声梵鐘の如し弁も亦さはやかなり。其のかみの事ども語り出で、慷慨の状おもてにあらはれたり。我らもいよゝゝ懐旧の情にたへざりき。

六日 午後

本科一年生 宗村 信喜

昼飯後笠置の山嶺を廻る。巨岩峻崖多く道いと険し。行宮の遺趾といふ処に至る。繞せる柵も無くて竹木しげりに繁れり。峯高く谷深く一步を誤らば千仞の底にまろびなむとす。徑にそひて登れば龍樹虎岩其の間に横れり。其の奇其の景写さむと欲すれども筆力なきを如何にせむ。颯とふき下す松風に誰かは其のかみの関の声を思ひいでざらむ。忠臣義士の熱血をそゝぎし跡今もちしほの紅葉散りしそ。誰かはあはれを催さゝらむ。まして山かけ深う霧たちこむるあたり天つ日影の小暗きは其のいきどほり今に晴れざるにや。

太平記笠置行幸の条に

忝くも十善の天子玉体を田夫野人にかへさせ給ひてそこもしらず迷ひ出で給ひける御有さまこそあさましけれ。いかにもして夜の内に赤坂城にと御心ばかりを尽させせけれどもいまだ習はせ給はぬ御歩行なれば夢路をたどる御心地して一足にはやみ二足にはたちとまり昼は青塚の陰に御身を隠させ

たまひて寒草の疎なるを御座の茵とし夜は人も通はぬ野草の露わけ迷はせた
まひて羅縠の御袖をほしあへず。とかくして夜昼三日に山城多賀の郡なる有
王山の麓まで落ちさせ給ひけり
とあり。おのれ此の文を読むごとに凄然として膚に粟を生ぜざることなし。誰か
亦こゝに至りて巻を掩ひて嘆かざる者あらむ。

そもく元弘の帝よ。金剛の峯にかゝる白雲の八重一重に頼みし赤坂の城はつ
れなき嵐にふき破られむとは思ひたまはず。この草繁き黒木の宮に夜なく御夢
おだやかならで苔深き巖の白露おきふし毎に御心を碎かれ軒ふく風を玉だれのを
すもる音にきゝなしたまひしもあはれやな。やよ藤房。こゝも豺狼の人食まんと
るけはひ。よしや。柴こる賤のむぐらなれ。楠とやらん多聞とやらんに露のたづ
きをしばし求めむとて火焰の皇居のがれ出で給ひこの幽谷のこゝしき岩根を枕
としたまひて如何なる御夢をか結ばせ給ひけむ。松の雫の御袖はいかばかり露け
くましくけむ。さても九重の雲深くおはしける万乗の御身をしてあめが下には
隠れ家もなしの御なげきあらせまつりけむ虎狼北条が心よ。

見上ぐれば鬱たる老松風無くして峯に声あり。木の間のましら声さびしく下行
く木津川は恨を今に流すらむ。瀬音いとすさまじ。

笠置村宇有市・大川原村宇大川原など過ぎて四時三十分ばかりにや。三重県下
伊賀の国に入る。行くく上野まではと草刈る農夫に問へば二里には足らざるべ
しと答ふ。又道ゆく小童にこゝよりはと聞けば二里半なりと告げぬ。いづれまこ
とならむ。鳥が原村につきしは六時頃なりけり。此の里よりは一里なりと聞けば
月の光に道をたどりてまた歩を進めたり。やうく上野の旅舎白銀屋につきしは
七時四十分とぞ覚えし。此の日程凡十二里。

七日

本科一年生 高松 四郎

午前六時ばかり車を列ねて出でたつ。山国なればにや。霧深く立ちこめて太陽

も光りを失ひさながら朧月夜の如し。此所には旧城跡ありと聞きしかど汽車にと
急ぎしかば見えざりき。まづ府中村にかゝりて服部・印代・佐那具などを過ぐる
に霧ますますいみじければ皆かささをせり。西柘植村に至りし頃は朝日やうく
光を放ちて霧はれたり。それより柏野・御代・下柘植を経て東柘植村にかゝり中
柘植を過ぎて上柘植なる停車場の前に至る。折しも乗り込まむとせし其の汽車は
笛声高く黒煙をはきて走り出でぬ。くやしき事限りなし。車引きたる男子等は宿
屋にてだに早うなしたらむにはかゝる事にもならざりけむをなどいふ。師の君た
ちも宿の緩慢を怒り給ひその罪を責めむとて阿知和氏にはがき認めさせたまひ
き。かくて次の列車を待たむか。又此所より徒歩にて行かむかと師の君たちの相
はかられしに次のを待たむと言ふ方われらが中にも多かりければあたりの山に登
りなどして二時三時を費しつ。発車の時も近づきければ数多の客停車場に集り
ぬ。其が中に人々の目をひきしは岡田組といふ旗持ちたる渡韓の工夫なりけり。
その数二十人ばかりにていづれも骨格たくましく男子のみ。中には刀めくもの携
へたるもありき。

唐国に行くとし聞けばえだちするしづのをさへも羨まれけり。

此の度は草津の方へと津の方へと汽車同じ時に来たり。彼の人夫らは草津行
きの方に廻りぬ。おのれらは津行の方に乗る。行きく加太の峠にかゝりし程
車少しよどむやうなりしは上り様なればなるべし。隧道の常闇二つ三つ過ぎて間
もなく関の停車場に着きぬ。時に正午十二時なりき。此所より三橋教授と松本氏
とは病気のため津迄乗車せむとて袖を分たれたり。おのれらは線路のかたへの田
圃にて昼食ををへ一身田なる専修寺に待合はする事と定めてゆく。おのれは宮
島・井上・山本の教授たちとおくれて立ちぬ。時に十二時半。少しばかり行きて
初めて追ひ及きしは阿知和氏なりけり。やがて宮島教授今日は最後の競走を試み
むもおもしろからずやと言はる。さなりと答へて共に急ぐ。後を見かへれば井
上・山本の二教授と阿知和氏とは遠く後になられたり。猶急ぎに急ぎて先なる一

群を乗り越えしに遙の先に森氏見ゆ。又急ぎて追ひ及きしに猶先に二人の行くあり。はしりて追ひつけば館・澤田の両氏なりけり。此の先に行きつる者ありやと問ふに中村氏行けりといふ。さては是には及ばじかと又も足を早めてひた走りに走り行けど影だに見えず。遇ふ人毎に問へどもあはずといふ。やがて大塚氏走り来て此の群は三人となりぬ。猶急ぎて鈴鹿郡古厩村・奄芸郡明村字楠原村を過ぎ村はづれより路傍の人に教へられて近道といふに入りぬ。細道多きにまよひつゝ、たどり行きて漸く本道に出でたり。されど中村氏は見えず。さてはあざむかれたり後の一群の内なりしなるべしなど語らふ程に後より呼ぶを見れば果して中村氏なり。是より四人して行くに森氏また走り来たり。しりへに安藤氏も見ゆ。こはそもいかに。かく迄急ぎけるものをとてくやむ。安藤氏にはおひつかすまじとて殊更に歩みをゆるべ見かへりつゝ、早くくゝと誘へば困しげに走りく。漸く近づくを待ちて皆駆け出づればいとうらめしげにあと追ふもおかし。是よりは一人も群には加へじなど言ひつゝ、走るに程なく一身田村に入る。専修寺も見ゆ。此の時井上教授と阿知和・近藤の二氏とは車走らせて来られたり。宮島教授は声をあげ此処まで来りて乗り越えられむは残念なり。はしれや。はしれ。一人も車に後るなと、呼ばはりつゝ、真さきに駆け出でらる。おのれもしばしつゝ、きしかど毛布など身にまきたれば思ふまゝならず。井上教授の車を待ちて之を載せ又走りいづ。専修寺はますくゝ近くなりぬ。かしこまでぞと息もつかずて車を遠く追ひ越しつ。やがて宮島教授を跡にし森・中村の二氏に追ひ及き大塚氏をもち越したり。今日の先登よ。今一息ぞと勇みて走る。此のあたりの人々門に立ちて怪しげに眺めたり。車を見ればいみじう遅れぬ。あな心地よやなどおもふ程に大塚氏もはせつたり。おくれはせじと先を争ひしが停車場の前に到りて一足おくれぬ。くやしや。寺の門迄にはと競ひしかども遂に大塚氏に先だゝれたり。先本堂の階にて息ふ。時に午後二時半。此の寺の結構いと壮大にて其の道の学校もありき。かくて遅れし人々をまち合はせて津市に入り桜水樓に宿る。此の日行程凡十四里余。

八日午前

本科三年生 石川 勝

八日同じ旅の宿りにはあれど伊勢としいへば何となく心強く思はる。さるに昨夜同行者の気色のすぐれぬやうなるはいかに。津とは云へどまだ十里をへだつればにや。はた外に故あるにや。夜あけて朝日子の影水平線に出づる頃漸々眠を覚しつ。されどあたり闇として人の起き居るけはひもなし。さては心安し。今しばしと思へどねむられぬまゝ、に指をりかぞふれば本月一日皇學館を出でしより茲に八日。多武峯に藤氏の祖廟を拜みては其のかみの権威のいかばかり盛なりしかを追想し檀原に皇祖の御陵を拜しては天位の無窮なるを祝し法隆寺に音づれて其の壯觀に驚き笠置に行宮の跡を尋ねて今昔の感に堪へざりし事さへありきなど過ぎこし方そゞろに思ひ出でられぬ。暫ありて人々皆起き出づ。朝飯をはりて正午迄の自由散歩を許されたり。今日は午後の汽船にて帰館せんとす。げに思へば今日は修学旅行最終の日なりしなり。こゝに初めて知られぬ。昨夜同行者の憮然たりしは今二、三日も猶予あれかしとの為ならむとは。されど今更せんすべなれば許されしまゝ、に公園に遊ぶもあり。木太刀を買はむとて出づるもあり。病院にゆくもあり。

跡にのこりしは僅に五、六名に過ぎず。しかもこたび旅行にて足よわの名を取りし人どもつれづれなるまゝ、に兎やせむかくやせむなど評議まちくゝなり。中に肥満の大男おのが足のにぶきをうしと歌ひし男横ざまより無遠慮にも人の批評などし初めたり。たれは思ひしよりもつよし。かれは吾より弱かりきなどおのが事いさ、かも言はずて人の事さまぐゝにのゝしりさわぐもいと興あり。又一人あり。体ちいさからねど日頃の疲労に顔色すぐれず。常にひそみがちなりけるが今の言葉を聞きてさすがに口惜しくやありけむ。先の男にむかひさはいひ玉ふな。みづからをかへり見たまへ。いついかなる処にか先がけせし。常に殿となりしにあらざるやなど打かへす。又一人傍より云ふやう先には人を人とも思はず尤も労るべき相ありなど云ひなせる身の今は如何に。あな心地よやなど云ふは皆おのれ足

の弱き中にかどへられたるがくやしさにかくはうめき出でたるなりけり。さるにても宮島教授の足の強さよ。始は弱げに見参らせたれど日頃ふるまゝにますく得意の色をあらはし給へり。彼の多武峯の駆足。いかに其の名の高かりしよ。ことに跣足は尤も長所におはすとかや。次に山本教授は如何。亦上野の先登者として其の名を轟し給へり。次に三橋・井上両教授はいかに。井上教授は小がらの方なれど足はいと神速におはせり。三橋教授は病痾の爲め日頃の氣質にも似玉はず。常に鬱々としておくれがちにおはしぬ。いと口惜しきことなりかし。こゝに又一人静に口を開きていへるやう我等生れてより以来様々の旅行はせしかど今度程面白くて身に利益ありしことはあらず。されど吾々が服装の不完全なるはいたく口をしきことなり。あるは支那人と見誤られあるは売卜者とみなされたるなど実に本館の面目にも関はることなりかしといふ。吾もかく思へりとして例の肥満の男身にはスコッチの背広の洋服を着たるがいと寒げに火鉢にすがり居て君等僕の出で立ちを見玉へ。如何に軽げに見ゆらむ。かくありてこそ旅は心安く足は軽きなれ。羽織袴のいでたちはわづらはしきが上に壮士めきていと見苦しなどおのが形の土木師測量師などと見誤られたるを打忘れていと得意に洋服の便をいひ張れり。さればこそ君の足は強かりしなりけと一人がいへば皆笑ひぬ。さるにても早晩一定したきは皇學館生徒の服装なりけりなどいひしるふほどに時針は十時を指せり。先の人々は帰り来ぬ。木刀はおのゝ室内に持ち運ばれたり。こゝに衆目亦ひとしく木刀にうつれり。長さは二尺八寸ばかり。振らば風を起し打たば石をもくだかむ状たしかにあらはれて見るもいと心地よし。

余は是より知友を師範校に訪ふ。さすがは地方税を仰ぎて建築せし学校なればにや。其の壮麗なることいふばかりなし。校舎は巍然として旧城の中央に聳え白聖は日光に反射してまばゆく玲たる洋琴の音は松声と和して青年有為の学生を慰むるが如し。知友を問ふに授業中なればせん方なく一葉の名刺を残して立ち帰りぬ。

ひるげをはりて出立の用意も整へり。汽船は二時に出帆すと云ふ。名残を桜水樓に留めて東の方贅崎港に向ふ。時に午後一時半。此の日天気晴朗空に一点の浮雲なく贅崎湾頭波静にして白鷗汀にねむれり。遙に望めば朝熊岳は南方にそぼだちて我等を歓迎するが如し。彼の青螺の浮ぶが如きものは志州群島ならむ。かの白鶴の翔るが如きものは布帆の来往するならむ。とかくする程に一声の汽笛は白鷗の眠りを驚し一隻の船は黒煙を吐きて来りぬ。あはれこの船。白鷗も無情の者とやおもふらむ。

八日午後

本科二年生 中村 亀次郎

切符もとめてはしけに乗る。けふは風なく空うらゝかにして船行にはよき日なり。本船につきたれば人々われ先にと乗り移りて甲板の上にいづ。船は速力をはやめて進む。おのれはしばしあたりのけしきをながめ居たれど日ごろのつかれにたへで横ざまになりぬ。我らが八日の旅路も事なくをへたり。さるにても征清兵士の労苦やいかならむなど思ふにあら怪し。沖合遙に烟の見ゆるは。しかも三ところ四ところまでもとよぶ声す。何。烟見ゆとや。いで何れぞと打みやればまことや。今迄は青きぬ張りたらむやうなりし西の空や、墨色を帯びたり。烟はやう／＼たちまされり。折しも大声用意の号令は下りぬ。さてはけなげにも敵の艦体おしよせたりな。あな心地よや。おもしろや。たゞ一打ちぞといさみたつ。我が十二隻の艦体はいよ、進みに進む。程や、近うなりぬ。二十隻ばかりもやあらむ。檣上高くひるがへるはまさしく黄龍旗。縦陣をなしてぞ進みきたる。天柱折れ地軸くだけむも間一髪を容れじ。開戦旗はたてられぬ。用意は成りぬ。彼やうつらむ我よりやと思ふ一刹那。轟然一発空を衝いて飛び来る榴弾。波を起して水中につきいれり。弾又弾。轟々とひびきたるすさまじさは百雷の一時に落ちか、りたらむが如く黒雲なす烟はさしにも広き海原をとざして昼猶暗し。かしこにやかれて焰天をこがすあればこゝには沈められて救を求むる。声急なり。打ち

てはしづめ沈めては又追ふ。いさましとも勇まし。にげのこりし敵艦も今はこ
とくく海の藻屑となりはてたり。このさま見るより我れ知らず万歳とさげぶ声
に覚め来ればこれ船中一睡の夢。日頃の我が思ひ夢にかよひしなぬり。さきの
程より何におそはれたるにかと友どちの間ふも猶夢のうちなる心地せらる。

船ははや神社港に着きぬ。時に日は西山にかたむきて鳥はねぐらにかへり晚鐘
もひびきわたりぬ。月中空にかゝりてほのかに海づらをてらせり。人をしてあは
れをしらしむるものはげに秋の夜の月にこそ。はしけは岸につきたり。足はな
よくとしてあゆみがたけれどもせんすべなし。はふが如くにして陸にのほり
ぬ。腹も空しくなりたれば物食ひてゆく。神社の堰を過ぐる程猶波にゆるる、心
地す。船江・河崎の里をすぎて尾上なるおべの坂を越えぬ。古市町・中之町・桜
木町はいつか過ぎけむ。間の山を下りて宇治の里に入る。時は九時頃にや。人々
足の痛さをも忍びていかめしくとりつくろふもおかし。樂しかりし修学旅行も
こゝに事なく終を告げたり。一同皇學館の門内に整列して万歳を唱ふ。

天皇陛下万歳 神宮皇學館万歳

(奥付)

明治廿八年五月 日印刷
全年 全月 日出版

編輯兼 宇治山田町大字浦田
発行者 神宮皇學館寄宿舍
森 幹 三 郎
発行所 同上
神 宮 皇 學 館
印刷者 三重県度会郡神社町
大字馬瀬壹番屋敷
佐 田 龜 之 助
印刷所 宇治山田町大字岡本町
山田活版所大成舎

附、『同窓会雑誌』第三号「雑録」より

(前略) 本科生十五名は教授三橋要也氏始教員四名之を引率し十月一日より八日迄大和地方へ修学旅行をなしたり。左に山本助教が後日の紀念の爲にとて経歴目観せし所を概記せしものあれば掲げて諸君の高覽に供す。

十一月一日晴午前三時半皇學館出発、余等四名及び本科生十五名(事故ありて二名は行かず)合せて十九名の同行なり。五時半宮川停車場に着し同六時廿分汽車に搭し宮川を發し七時廿分六軒に着す。是より下車して歩行す。午前九時一志郡片野村の村外れに到り松林中に休憩し弁当を開く。菜は梅干と漬物とのみなれども快味言ふべからず。近傍の茅屋より茶を貰ひ来り数椀咽を湿して復行く。其より阿保山峠を越ゆ。坂路羊腸一步一喘困苦少々にあらず。同五時半伊賀国阿保駅に着し田原屋に一泊す。此の家の下婢は一見娼妓風にして嬌姿婀娜客に媚ぶるに似たり。実に一個の怪窟なりき。此日汽車路を除きて行程凡十四里余。初日の長路なれば甚疲労を覚ゑたり。

同二日晴午前七時怪しき巢窟を出發し颯々たる秋風に衣袂を吹かせて行く。郊外の息速別命(土人阿保親王の墓なりと伝へたりといへり)の御墓を拜し名張町を過ぎ八町坂を登り大和国宇陀郡三本松「ぬしや」にて昼食す。菓子椀を作らしむ。異様の自氣鼻を撲ちたり。時正に十二時少頃にして大字大野の弥勒を(丈二丈六尺)一見し(但これを見し人は先発の人数のみ余等大部分は残念ながら見遺したり)午後五時式上郡初瀬町に着同所紀の国屋に一泊す。此の日行程凡十里余。此の日も亦甚疲労を感じたり。三橋君及び余兩人当宿に着するに先ら迎への腕車に遇ふ。宿屋の主人か篤志によるものなりと聞き喜悅满面直に乘車す。その前後にも同じく發車して宿屋に着したるものありと聞けり。

同三日晴（天長節当日）早朝三橋・井上両君及び余、外に生徒近藤弘代四名にて与喜山天神を拝し初瀬の観音及び境内の古跡（貫之の梅等）を縦覧す。（爾余の人は昨夕觀覽を了へたる也）爰より腕車を命じ三輪町大神神社に至る。先発の人既に在り。即拝礼を終へ同郡金屋村なる東吉貞氏を訪ひ当国地理及び古蹟の所在を尋問す。それより十市郡に入り桜井町を経て（このあたりにて耳無山畝傍山天香具山の三山を遙に望見したり。その時は万葉集或は古代歴史中の人物と成り了せし心地せり。）阿部村古墳石棺（岩窟中にありその内暗黒なりしを以て傍側なる茅屋に請ひてカンテラを借り内部を検す奇にして古く実に一驚を喫したり）及び文殊院古文書等を巡覽し多武峯村大字倉梯なる 崇峻天皇の御陵を拝す。多武峯に登るに坂路峻にして遠く百難を嘗めて絶頂紅葉館に達す。爰にて昼食をなす。昨夜旅宿に命ぜし弁当のみにては不足を感じる迄に飢ゑたるを以ちて仕度を命じ飽食す于時午後二時。少憩後談山神社鳥居前にて祓除式を行ふ。余は榊を阿知和氏は御塩を以ちて祓除の式を了ふ。（榊は無ししかば真盛りの紅葉を以ちて之に代へたり）此処は実に楓樹に富める峯にして霜葉燦爛二月の花よりも紅なりき。人皆龍田の紅葉も之には如かざるべしといへり。

即同社に参拝し宝物を拝観す。それより高市郡に入り高市村岡寺の古刹を一見し飛鳥井村大字飛鳥井なる飛鳥神社に参拝し同村大字橋村の橋寺に至る。時に日既に暮る。辛ふして暗路を辿り 欽明天皇御陵及び吉備姫命の御墓を拝し久米寺を過ぎ白檀村大字畝傍檀原神宮前に至り祓除式を行ひ拝礼の後 天皇陛下の万歳を大呼す。午後七時半同所山本福本屋に投宿す。福本屋は外部不潔に見ゑ（内部之に副ひ殊に雪隠湯場等を甚しとす。朝起口す、がむとすれば雪隠の手洗場に至り同一の柄杓を用うるなり。余輩潔癖者流の堪へうる所ならむや）たるを以ちて宿泊を躊躇したり。右の如くなるを以ちて様々の苦情起り宿屋も閉口したるやうなりき。然れども弁解甚勉め接待も注意を加へたるは稍慰むるに足れり。是も話の種とやいはむ。此の日行程十余里に達し山岳丘陵を跋涉し且暗夜路を失して実に困難を極め

たり。当日は天長節の佳節なるを以ちて投宿の後祝物を分与す。（即祝酒一升六合）

四日雨午前七時福本屋出發、同家より案内者を立つ。先檀原神宮に詣で次に 神武天皇綏靖天皇の御陵を拝し今井町・直督村・平野村を過ぎ広瀬郡に入り百濟村なる式内櫛玉比女命神社を拝し川合に出で広瀬神社に詣づ（三橋・井上両君・余三人は衆に後れ腕車にて）次に平群郡に入り法隆寺村「かせや」にて昼食す。時に午後一時半なり。少頃の後案内者を雇ひて法隆寺に入り建築物宝物古蹟等を縦覧す。（末派の僧輩金銭を貪るが故に大枚五十銭余を投じ始めて宝物を見る事を得たり。加之非常に勿体ふりて少しも宝物に触れしめず且説明は漫りに漢語を挿入し耳ザハリの言語を反覆したるは嘔吐を催さむばかりなりき。此外立合にて宝物殿を開けば其手数料を要するなりと金貪りたり）寺院堂塔は古称して少許の色を帯び結構壮大尋常の者にあらず。その名江湖に嘖々たる亦宜なり。それより法隆寺停車場に到る。汽車出發後にて甚残念なりき。待つ事凡一時間余次回の五時廿分発の汽車に投じ奈良町に入り猿沢池畔釜屋に投宿す。時に午後七時。此日行程凡七里余。終日雨降道路泥濘の為行歩頗る困難にして疲労も前日に譲らざりき。

五日快晴午前七時半釜屋出發、猿沢池・興福寺等を巡覽し春日神社に詣て、神樂を奏行し宝物を拝観す。井上君の知人同社禰宜大東延慶氏の案内に由れるなり。其より有名なる東大寺大仏殿・二月堂・三月堂等の古蹟を巡覽し正倉院（聖武天皇の御手道具を納めたるものなりといふ）の外部拝観（勅許を得ざれば入りて親しく拝観する事を得ずとぞ）の後其近傍の芝生に息ひて昼食す。午後二手に分れ一手は（井上頼文・阿知和両氏）元興寺帯解地藏を一眼し山辺郡に入り在原寺・柿本寺等の古蹟を吊ひ、石上神宮を拝し神宝を拝観せり。一手は（宮島君及び余二人、十四名の生徒を率ひて行く。三橋君は正倉院より不快の為帰られたるは残念なりき）開化天皇

御陵聖武天皇御陵仁正皇后の御墓を拝し法華寺を一覽して添下郡に入り磐姫皇后御墓・平城天皇御陵・日葉酢姫命御墓・成務天皇孝謙天皇の御陵を拝し西大寺を一見す。尚進みて菅原天神を拝し菅公出生の遺跡を問ふ。次に安康天皇・垂仁天皇御陵を拝し(垂仁天皇の御陵は諸陵の中規模尤大に覚えたり)唐招提寺・薬師寺を巡覽して郡山に出づ。馳せて停車場に到り汽車に搭じて薄暮釜屋に帰る。此日行程凡七里。時日限あるをもて精細に觀察する事能はず。見遺したる所もありしは甚遺憾の至也。

六日晴午前七時釜屋出発、光明皇后御浴室の遺跡及び般若寺を一覽し山城国相楽郡に入る。梅谷村を経て加茂村なる式内鴨神社を拝して笠置山に上りて昼食す。時に十二時三十分。坂路峻嶮にして一步進みて一吐息す。甚苦辛言ふべからず。斯る事は余生れてより初てなりけり。山僧出で、説明甚務む。言論著々肯綮に中懐り慨の氣象眉宇に見はる。弁亦雄勁にして実に驚愕に堪へず。住職らしき僧亦性質淡泊茶料を受くることを拒みて止まず。宮島君辛うじて之を受けしめたり。少憩後醍醐天皇の御遺跡を吊ひ木津川に沿ひて上り大河原・鳥ヶ原を経て伊賀国阿拝郡に入り上野町白銀屋に投宿す。時に午後六時半。此日行程凡十二里。宮島君及び余の外に高松四郎・中村亀二郎両人都合四人(二名は途中余等に追及せし也)歩を早めて進行し最早く旅宿に着せり。余の先着は此日初てなり。然れども身体脚部大に疲労し寸歩も致しがたき程なりき。

七日晴午前六時半腕車を連ねて白銀屋を出発す。殆ど廿台の大数に上り威勢堂々として馳駆するなれば頗る朝起惘々の人目を驚したり。野外朝霧濛々として咫尺を弁ぜず。加ふるに寒風凜乎として皮膚を侵し不快甚し。走ること四里余(此間腕車賃錢一人前十九錢)九時過柘植停車場近辺に至る。一声の汽笛耳を欬くと思へば黒烟を残して汽車は早く進行するなり。此間の遺憾衆人咸然り。或は宿屋の緩

慢なりしを罵り車夫の遅々たりしを恨むるも理なきに非ず。実に宿屋は不都合なるものなりき。汽車発着の時刻を誤報しその賃錢をも誤りて教へたりき。然れども今喋々するも益なければとて阿知和氏に一通の端書を認めしめ直に汽車便に托す。即宿屋の不都合を咎責したるなり。待つ事二時間許十一時二十九分発の汽車に投じ暫時にして鈴鹿郡関に着す。三橋君及び松本昌三両氏は昨夜来不快なるをもて津迄乗車す。余等十七名は直に下車し同所田畔に腰打かけて弁当を開く。滋味尋常にあらず。時に十二時を過ぐるご半時間勇を鼓して奄芸郡に入る。椋本村を経て一身田に至り専修寺を一覽す。この寺亦結構壯麗多くその比を見ず。大和地方寺院仏閣に富みたりと雖も結構の偉大なる点は専修寺に譲るなるべし。唯古色を帯びて感想を湧起せしむるは専修寺豈彼に如かむや。午後五時半津市に着。桜水楼に投宿す。此日行程汽車を除き凡十里なり。(腕車の路程を除けば僅に六里許なり。然れども前日の疲労尚癒えず。層一層の苦痛を覚えたり。)

八日晴午前津市高山神社を拝し公園を遊覽す。園内茶店数家あれども多くは閉店中なり。時節の寂寥なるが為ならむ。午後一時同楼出発二時発の汽船に乗りて進む。午後六時比神社港に着す。一同同所の鱧鈍屋にて一碗のうどんを喫し空腹を治め同八時頃帰館す。